

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十四年三月二十五日 印刷
昭和四十四年四月一日発行 (毎月一日発行)
(第四十三号)



No. 43

特集・花と酒の句

四月号



えらばれ

みがきぬかれた 灘の酒

超特撰 日本盛



超特撰 (化粧ケース入)
一、八リットル詰・一、四一〇円

酒 清
日本盛
ニホンサカリ

灘 西宮酒造 醸



国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

う お また
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186(代)
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

風光明媚な
海岸美を
誇る

今月のことば

齒にきぬをきせた涙の不潔なる

協力はしますと裏切りまばたかず

扉がしまるニンニク臭も押しこまれ

腑におちぬ眼鏡屋ほんとの齢をきき

十九平氏を悼む

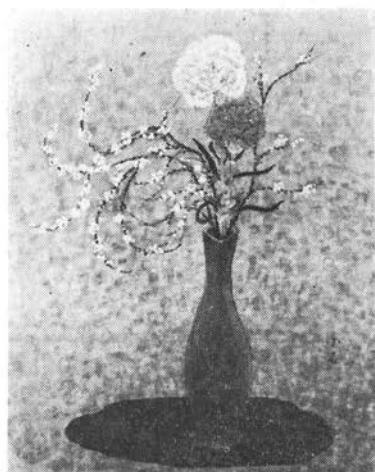
君去りし謎とけぬまま泣きぬれる

中島生々庵

親しくしていた人、尊敬していた人、相抱いて泣いたり笑ったりした仲の人、こうした私の周囲の人達が近頃つぎつぎと櫛の齒のこぼれるように死んでゆく。生れては消えてゆくうたかたを諸行無常じゃと冷たく観じ、私という存在が百億劫年の中の一瞬だと思っておしてみるには気の遠くなる程遙かな悟道の入口である。しかも難儀なことに、何かを求めながら一人で生きてゆかねばならぬのが人の世の宿命とあれば嫌でもその寂しさに耐えてゆかねばなるまい。それでは何を求めるか、

その青い鳥の見当さえつかずとすれば右往左往を続けるしか手はないわけである。その右往左往の中で心の灯となる句の一つでも与えられたらせてもの支えであると私の悲願がある。

かつて読んだ東京タイムズの岡村会長の四行詩が、今突然私の頭を横切って行った。幸福—もしもそんなもの掴んだら、ラグビーの球を抱いた選手と同じさ、追われ、タックルされ、奪い取られ、あとは擦り剥いだ膝小僧が痛むだけさ。



「花」 中島小石

川柳塔四月号

川柳塔四月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵……………(1)

川柳塔……………(同人作品)……………中島生々庵選……………(4)

北方性川柳……………工藤甲吉……………(2)

川柳日記……………麻生葭乃……………(26)

川傍柳初篇研究……………(七十)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄
川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

秀句鑑賞……………清水白柳……………(28)

二賞中間発表……………(30)

長女結婚……………高鷲亜鈍……………(51)

中国漫才考……………(大陸巷談)……………東野大八……………(42)

私論・柳論

「北方性川柳」

四月ノ陽光が一段ときらめいて、私の住む本州、北の最はて、「津軽」にもさすがに本格的な春が訪れました。三好達治の詩「雪」の

太郎を眠らせ 太郎の屋根に雪降りつむ

次郎を眠らせ 次郎の屋根に雪降りつむ

そしてまた私の下手な句

天も地も人も消されて吹雪する
このような長く苛烈な冬のあとにやってくる北国の春ですから、私たちには春は歓喜そのものです。
ですから

春になれば すがま(氷)コ解
けで 泥鎧っこだの 鮎っこだ
の 夜が明げだと思んべなあ
という、いわゆる「津軽の旋律」
がおとなの口をもひとりでに突
て出るのです。

十九平さんを偲んで……………本田恵二郎…(44)
 安亭氏を悼む……………工藤 甲吉…(27)
 花と酒……………(同人特集)…(22)

正本 水客・水粉 千翁・浜田久米雄
 水谷 竹荘

大萬川柳大会……………(53)

近作柳樽……………菊沢小松園選…(32)

雅号ぶつちやけばなし……………工藤 甲吉…(59)

初步教室……………本田恵二郎…(50)

大萬川柳「誕生」……………清水白柳選…(52)

★柳界展望……………(薫風)…(54)

★本社三月句会……………(庸佑)…(56)

★各地柳壇……………(文秋)…(60)

「セールス」……………光好陽子選…(48)

一路集「背広」……………長谷川紫光選…(48)

「肌」……………長谷川三司選…(49)

★編集後記……………(二三夫)…(64)

ところで私は、この春に思います。それは、私流の風土性川柳、つまり「北方性川柳」のことです。北国・雪国は、春、夏、秋、冬、野、山、海、草、木、里、人等々すべてが詩です。また独特の風俗・習慣もあります。そこでこの「風土性」即、「北方性」を句の上にふんだんに投影させ、北方独特の香りをもたせる、というのが「北方性川柳」というもので、私の願いなのです。しかし、歌、俳句ならまだしも、川柳は異なります。したがって、たとえば今ここにネブタ去ぬその後いつか秋の風漆黒の海絢爛とネブタゆくなどと、青森の夏の風物詩ネブタを句にしたとしてもそれは所詮、局地的なものに過ぎず、全国的に共感を呼ぶことはできません。これだけ考えても「北方性川柳」の一本立は、容易でないことも、わかるのですが、けれども私は悲観しません。孫も一年生、私も「北方性川柳」一年生の四月です。

(工藤 甲吉)



中島生々庵選

老妻の死

冷えぬうち合掌させて妻と別離
父の時母の時より淋しうて
天国へ淋しくないか一人旅
余命いま妻の遺影と差し向い
生死一如五十年の女夫仲

伊丹市 小川 静観堂

大阪市 金井 文秋

間の抜けた時分にひとり風邪を引き
腰だけは歌手並に振り孫唄い
追憶の中みつ豆の恋もあり
一人娘を出した淋しさ犬を飼い
ポーナスの月はがっちり取る月賦

大阪市 中川 滋雀

ぐれたのは世間の罪と居直られ
鍵かけたドアーたしかめ引いている
不機嫌の取りつくしまもない煙草
雑巾になつて汚れを絞らされ

母七回忌

命日の思いあらたな灯が明かい

京都市 都倉 求女

夜霧の舗道つい鼻唄が大きなり
地下道を出て結局はどほ濡れる
真っ黒の雲からこんなに白い雪
冬の雨心の底まで降りこめる
ストーブの加減も親と子で違い

倉敷市 野田 素身郎

共稼ぎ贅沢覚えさしただけ

こんな家からもピアノの音がする
春を呼ぶ雨だ蛇の目をさしてみる
左遷の地雪が真横に降ってくる
運賃は値上げ通勤距離は延び

堺市 高橋 千万子

御命日自分のすきな供え物

初恋の人の喪服に狂う我

内緒金二号預る程になり

どの家できこう団地のきき合せ
地図にない方が立派な道になり

香川県 三井 醉夢

回想（五句）

かすがいになれずちちは引き裂かれ

花街のひとり娘は閉じこもり

居続けの客打つ鼓淋しくて

衣食住足りて瞼の母を恋い

泣き虫になるまいとした幼な髪

鳥取市 藤本 礎山

過去を断つように落下す不動滝

城下町蝕ばむようにビルが建ち

快諾を得た日の汗は苦にならず

黒がよく似合って妻の静かなる

清い恋ぐるぐる池をまわるだけ

京都府 大鶴 喜由

首巻きに寄れば狐の眼がにらむ

性教を母に迫れば母黙し

それみたか女上位は飾りもの

母も手伝ってやり恋みのる

読心術足らず痴漢にされかかり

青森市 工藤 甲吉

若者を平和ニッポンもてあまし

減税というアドバルーンガスが抜け

冷凍魚みたいに雪の中に住み

まっすぐに帰る我が家は酒が無し

孫を叱ってどうかしていた

岡山県 浜田 久米雄

南から北へと告げる花だより

未亡人花見の猪口をすこし受け

苗代も春の色して粳を待つ

春たのしいものところへ桜咲く

孫連れた花見微醺のままですみ

豊中市 戸田 古方

あの美人鼻をこすればあんな顔

資本主義花まで狂い咲かさせる

どう描いたらできる閻魔さんの顔
善玉を考えるさえ烏澁に似て
ナムアミダブツああこは地獄かな

大阪市 正 本 水 客

十二単 雪のしじまに似た重さ
扉の向うは花道かも知れず
風のなかの一点になり 別れ
なんべんも風邪ひいたままに春
春に追いつく声 走らねば

高槻市 若 柳 潮 花

駄菓子屋のつけ馬つけて子が戻り
舞い初めへ春一番の顔で来る
つま皮を落しラッシュへ押し込まれ
客足を止めて色街雨が降り
舞台舞台御ひいき様もくたびれる

大阪市 石 倉 旅 風

人の夢消しにまわって来たアポロ
人の知恵嵩じて月を踏まんとす
うごめける地表の虫の小賢しや
あの人も禿げているのかベレー帽
磯に佇つ擬音ではない海の音

東大阪市 久 米 奈 良 子

愛の翹傷つくままに四十坂
ハンデイは女にないという勝負
捨てかねてやっぱりもとの端切れ箱
早春の対話 樹頭へ風のあり
迷いきし鳩の瞳はわが愁い

倉敷市 本 田 恵 二 朗

足跡を残そう砂のある限り
久方のふるさと雪があたたかい
心の垣がうれしい音でくずれた日
勝って泣き負けて泣かない男です
青い鳥まだ見つからず六十路ゆく

高槻市 傍 島 静 馬

新社屋仰ぎ躍進誓い合い
三寒に堪えて四温に風邪を引き
勤労のこんなところよい眠り
カーテンを下して散髪するなじみ
春風に神経痛もうずうずし

大阪市 本 多 柳 志

これたら買う気のテレビまだ写り
お人好しくらしの恥部も覗かれる
ほんものは撫でにせものは見つめられ
救急車角曲るまで見送られ

大臣が見に来る程の事故でなし

笠岡市 木山 遠二

長生をしようぜと立話で別れ
世間話嘘がまじっておもしろし
何とか云う議員が架けた橋と云う
おぶさって迂濶に背負投を食い
手放しで喜び白い眼に出合い

大阪市 橋高 薫風

元旦や棒の如くに師の一句
雪見えて特急列車熱帯びる
牡丹雪ゆっくり俺が昇天す

白黒記を祝う

読みつぐや冬の未明の白湯の味

悼 工藤安亭氏

君あらず浅虫の日は見えながら

大阪市 不二田 一三夫

一歳の恋人 不二田二三夫を狂わせる

北風は男の心知っていた

寝返えれど新らたな瞑想追ってくる

寄席(二句)

拍手まだ楽屋へ追ってくる冥利

東京太・京二NHKで大賞

漫才の直木賞だとはげまされ

笠岡市 木山 要次

トラブルの少しは欲しい生ぬるさ
補乳器で育ち乳房を振り向かず
借り本に燃える慕情の詩をそえる
老人ホーム明治のボスが居る平和
春よくなまた水虫が目を醒ます

鳥取市 河村 日満

労働が楽しい母と子等のいう
だがしかし地球は廻っているを云う
この家の無駄年寄りがきて叱る
俳画入門花の名などは知らず済む

芦屋市 丸川 初甫

人生の片棒かつぐ妻であり
大型バスバックの笛にあやつられ
竹馬の高さをほめて子煩悩
ベル押して待つ間の梅へ白い息

桜井市 岩本雀 踊子

雨雨雨 女も高き声になり
成人式さんづけにして呼んでやり
かけ足の冬にあわてた子沢山
共稼ぎ障子がきしむ暮しなり

神戸市 仲 どんたく

清貧と云うて慰む我が暮し
大往生本人それほど楽で無し
教育ママが育てて味の無い男
燃えるだけ燃えて夕日の落ちんとす

米子市 小 西 雄 々

キリストのおしえを破るプラン練る
打ち明けてならぬと過失へ念を押し
相談欄経験談でよくさとし
二次会は万歳三唱せず別れ

今治市 越 智 一 水

鯉はねる音だけ個室の恋はきき
マラソンが冬に負けない白いいき
あらそいのない静けさを墓地で知り
倅せは肩をならべて生きること

竹原市 山 内 静 水

絶対の自信が控え目に言わせ
生甲斐は今日花把を子等に受け
飾りつけ終って司会もテストされ
陽当りをほめセールスは腰をすえ

西宮市 島 居 百 酒

ライバルの献策なのでケチをつけ

去る者を去らせば独りだけとなり
山門を出て俗界で済度され
死花を咲かせたとは他人ごと

奈良県 麻生アート

水栽培乙女の祈りこめて咲く
古日記かせなかった日の記録
病室の突然変異ヒヤシンス
ペン習字恋知りそめた書架にあり

門真市 福 島 鉄 児

結局は命も金で値ぶみされ
補償金受ける幼き児を思う
電気カミソリ頭にひびく二日酔
ああ云えばこう云い返し丸められ

藤井寺市 西 い わ を

ふと気が変り香燵止めにする
思案ふと定まり青き林檎むく
喰べ物があるぞよ冬の雀来い
苅込みもせぬに整うポプラの樹

島根県 藤 井 明 朗

鈍行でもよし五十路の坂登る
儲けには遠い仕事はあり余り
別れとうない二人女崩れて来

母死す

今更に不孝多かりしを悔ゆる

大阪市 西森花村

羽簪造花も順番待っている

御先祖の墓地まで開発されかかり

煎じ薬に似た分量で料理法

月球儀買って十五夜待っている

倉敷市 水粉千翁

餌になつく鶏へ余生を話しかけ

夢ばかり釣り上げている糸を垂れ

待たされて茶漬けの音を聞いている

老婆心いつか判ろう梅を漬け

岡山県 直原七面山

ぬるま湯の中で育ったのが不幸

呼ぶ人を呼べとお医者者の暗い顔

六法を引いてお隣りと喧嘩

ライバルを意識してから万事派手

下関市 国弘半休

二月三日節分伊勢参宮(二句)

大神の西に満月朝詣で

玉砂利の音平凡な僕の音

髯を剃るだけの鏡台こわれてい

電柱の作業道具は腰にあり

広島県 高橋鬼焼

背の子の重みに二月の汗をふく

平凡な今日がはじまるパンを焼く

騒音のない古里におちつけず

ネオンぐるぐる今宵もおなじ色でまい

富田林市 川端東雲楼

うららかな朝よトースト匂う幸

一すじの髪にも投げる影のあり

希望退職第一号に職が待ち

ペンキ塗るかえローカル線の花だより

大阪市 大坂形水

淡路島へ帰郷(二句)

オレンジの島を空母にするつもり

偉ろなって郷土へ工場持ってくる

一寸ばかり儲け人生感覚わり

ギャラ上って毒舌鈍くなり

大阪市 山川阿茶

ひしひしせまる人生の剣が峯

野仏にお名前つけていとほしみ

綱太夫さんの死

トンカツを三枚ペロリの頃思う

立 春

春雨と思うてきけば春の音

松江市 中 川 晃 男

本年もよろしく医者年の賀状

傷心に差す傘重き牡丹雪

夜更けのハイヤーお隣りが帰ったらし

倍もする値段で食べるあみだくじ

兵庫県 遠 山 可 住

銀行は外車で行けば貸してくれ

電気毛布親孝行が一つ出来

家中が風邪正月が済んでいた

冬がぬくうて倒産するあほらしさ

岡山県 大 森 娛 句 楽

親心鉄砲玉の子に周章

早春の土堤抜きつ抜かれつ走るとこ

次男結婚

お歴々の顔々に恐縮し

宴席で妻袖を引き目をつかい

大阪市 室 谷 鉄 舟

主義として夫唱婦隨の娘に育て

一月八日叔父死亡八十三才

往診の尾灯見送る叔父危篤

惜しまれて朽木の倒れる如く叔父
はなむけの水顔中に冷たかる

名古屋市 吉 田 水 車

川上三太郎先生を悼む(二句)

柳の芽いまだ固きを逝きたもう

拍子木の音もこおるか夜のしじま

奴たこ威勢と別にひっかかり

腕時計キッチリ合うを不思議がり

出雲市 原 独 仙

結論は我田引水だのに拍手

当惑の果てに音痴の鳩ポッポ

過疎地帯主なき庭に紅椿

結論を先きに述べます長談義

室戸市 奴 田 原 紅 雨

しじみと語り終って自嘲する

独酌で飲みもやもと日が暮れる

見てないでフンフン言うてるからふくれ

子供みな寝かせおやじはどうする気

大阪市 福 井 多 蘭 子

上得意の縁談まとめ損ねたり

灰のような雪独りへ降り続き

眼で追うてお経和尚についてけず

前向きの心打ち清し庵居暮れ

岡山県 横山 一声

猛犬に注意と書いて出てこない

漬物の石が沈んで春となり

正月から赤字二月も続くらし

畦道も自家用通る巾がほし

平田市 久家代仕男

着飾らぬ成人式も有ってよし

叱られたことにておくい話

当節のなどと明治が吐き捨てる

いずれまたゆっくりなどと愚痴を逃げ

枚方市 宮川 珠笑

二杯目はままよで受けるコップ酒

玄関を出たら妻など恐くなし

保母さんを評定園児の審美眼

百数えあがる子供と湯に浸り

和歌山市 西尾 公作

銭湯の昼に謠をさらえて来

お茶碗の大中小の子が育ち

かき船の二畳に富士の画がかかり

冷凍えび頬すり寄せて凍ってる

島根県 大塚 勇

音痴家系通信簿せめられず

日曜日みんなでママを朝寝させ

する事が山程あつて炬燵抱く

物価高妻は御酒のことばかり

奈良市 村上 春巳

照準の向うに小さき命ある

幽玄のあかり重なり万燈籠

鹿の腹満たす焼野の芝が萌え

天平の薨そこまでビルが建ち

愛媛県 村上 旭童

ただ酒で痛めた胃とは言わぬだけ

大将ともいわれあいつともいわれ

本当の光がほしい福寿草

自己主張責任をとる顔でなし

倉吉市 奥谷 弘朗

春はまだ下積の身に物価高

酔えばすぐホラ吹く人で平のまま

日の丸が軒に淋しい官舎街

生甲斐を夫と言ひ切る素晴らしさ

倉敷市 木村 千容

天領のなごりこよなき倉屋敷

冬籠りせざるを得ざるほどに呆け

窓越しにぽかんと冬日眺めおり
余生いま香港Aの渦の中

守口市 羽原静歩

東大風詠（二句）

エリートの実ての人間うらぶれて
流感も封鎖も知らず山桜

非武装という血税の使いよう

そこはかの思い紅茶が冷えかかり

岡山県 藤原秋月

春の風まだ三億は捕まらず

税務署へボロ服を着て泣きに行く

憶病で速度違反もようしない

ゴミ箱で私の名刺が泣いている

笠岡市 出原真奇

どの顔も仕事ですんだ顔となり

ポットから玉露を飲ます味気なさ

人間の着ぶくれ笑うフキのトウ

骨壺がパパでは子供腑に落ちず

大阪市 福井野迷路

久振り強い握手に名を忘れ

佳い夢に覚めて中味は忘れとり

税務吏の話程よく子守歌

石焼きに芋の歴史を振り返る

岡山市 江国幽谷

本当の声で鷺山で鳴き

丙午などと放つとけない美人

頃合いの返事を孫は許さない

あの人もやめか羽織の衿を立て

大阪市 天正千梢

沈黙の重さたえがたく窓あける

話し合いまししょうばかの一つおぼえ

四角ばらず四角い話つりこまれ

雨だれのような小言で今日暮れる

愛媛県 渡辺曉童

湯豆腐へ女も寄って来る寒さ

そこでキスうっかりさせぬNHK

ブルドーザー昔は物を思わざり

三十人死んだくらいでおどろかず

香川県 岡田拳法

考えは変えずに名前だけを代え

最敬礼客を万円札と見て

渋滞は罵り合ってバックせず

ふんばりのきかぬおのれにおののきぬ

大阪市 西出一栄

風の子の群に見つけたうちの孫

上を向いて歩こう梅が咲いている

人間が「らしく」生きてくむつかしさ

ジェスチャーも豊かに入れて話し好き

大阪市 水谷竹莊

下足札昔は座って聞いた寄席

指名料取られてもよし好きな人

雪国の駅はうどんの湯氣を立て

老妻の方が行きたい寺参り

大阪市 児島与呂志

その辺の場処で済まない仲となり

旅便りなんと悲しい文字並ぶ

それ君の今のその目の悲しそう

文字一字々々の右肩上りまで似

呉市 林野甍光

宇宙船月は眺めるものと知る

反応を待つ菓子箱に底があり

歩道橋芝居のはねた音になり

新婚写真見つめて七年目の誤算

大阪市 酒田清子

今日あたり孫来る予感よう当り

蟹は横に這うからたわむれたくなり

真夜中の病院廊下吸い込まれそう

ふところも知らず転地療法がいいですね

美禰市 安平次弘道

単純な男ずばりと物を云い

失意の日頭を振れば音がする

並木道恋の歩巾は追い抜かれ

口説かれるうちが花よと爪をとき

ハワイ 羽佐間柳葉

予算案捕らぬ狸の皮も入れ

皮一重だけと悟れぬ美醜なり

初孫に這わぬ先から靴を買い

老人病待ってたように攝護腺

ハワイ 上田紅溪

正月は風邪引く間もない忙がしさ

母の帛布迎えに出た娘事故で死に

横着は人事尽さず死にたがり

鶯は鳴かねどハワイも春は春

新居浜市 安藤桂仙

穢いと言う其の銭になやまされ

文化とは馬糞に替る排気ガス

春うらら屋根の大工の歌を聞き

大阪市 西川誓二

百円が化けたパチンコよく這入り
筋書の動き勘繰る舞台裏

てれこでも我が人生に夢を持つ

笠岡市 松本忠三

外食を素うどんにしてホテル入り

きこちなく革靴履いて農閑期

肉親を他人にさせた遺品分け

倉敷市 藤井春日

旅行馴れしてふだん着の新幹線

馬鹿になり切ってから役がつき

創業十八年を迎えて

娘なら番茶も出花と云うところ

岸和田市 葛城伊三郎

医者 of 来る時分を痛い顔で待ち

拾い物届けた後の空しさよ

香港風引いたと日本の風葉

高槻市 福田丁路

真心でもてなす宿の時代めき

どの顔も吞ん気に見える春の宵

月世界到着迫る

地球見の宴と洒落込む日の近し

和歌山市 野村太茂津

雨降って地固らず時を待つ

ペテン師のビジネスですとツツポ向き

松の枝ぐんと伸びて岩の肌

大阪府 横倉富久一

下積みの父をお父さんお父さん

利口にもなれず馬鹿にもなり切れず

落水を倦かず受け止め岩の穴

松原市 谷垣史好

両手があるから左手怠けてる

四十とはかくも哀しくなま臭く

美しいひと美しく風邪をひき

大阪市 木村水洞

喧嘩していても夫婦は信じ合い

長女結婚

肩の荷を一つおろした気になれず

新西国巡拝

結ばれぬ恋で賑う道成寺

小松市 馬場魚山

酒よりも話に戦友同志更け

遭難を親の気持ちになって見る

北陸に育ち天気を賞めるくせ

鳥取県 清水一保

しみりとしたので音痴唄い出し

ヘルメットかぶってくぐる狭き門
まだ祈る母を社前に立って待ち

松江市

舟木与根一

一聞いて十間違えてばかりおり

大正生れ武運あった顔ばかり

暖冬の汚れが目立つ冬の川

普通寺市

岩田ひさお

口泡のはて五分五分の事故であり

涙もろい亡母であったと涙ぐむ

朝風呂に伴せ匂う桜色

出雲市

尼 緑之助

ゲバ棒で歴史を描くヒロイズム

ごねどくの理論日本をませかえし

ニユースニユースとあふる日本

岡山県

田村藤波

胃袋が腹八分目に妥協せず

百姓より土方がよいと国を荒し

ブルドーザ此処から火薬と交替し

泉大津市

高津徹也

我が子よ

日曜日やっぱり子等に負けちまい

ひらがなで名前が書けるふすまの字

つい兄を叱りかけては反省し

高石市

谷沢好祐

賭け事は月一枚の宝くじ

優等の亭主をちょっともて余し

鏡台の抽出し一つはパパのもの

鳥取県

森田布堂

棺が出る家にも賀状投げ込まれ

負けて来た猫に赤チンつけてやり

うどん屋の陽ざしに春の遠からず

熊本市

有働芳仙

警官に御婦人用のことばあり

折れ合ったところで算盤酒になり

辞表書きながら短気かなと思ひ

下関市

桜川不水

細長く暮らす話しも老夫婦

盃を受けて嬉しくふくみ飲

どっこいしょどれ一服に春の風

宝塚市

小畠無聖

あそこには我が終着の火葬場

泣かされた浮世にこんな甘い夢

立ち止まる両手があいた物忘れ

京都府

間嶋青丹子

庭先も綺麗に掃いて越して行き

子持ちとも見えぬ妓の洗髪

御土産のおもちゃ家まで待ち切れず

奈良市 宮口笛生

生活にゆとり奥様太り出し

春つかむうちの娘他所の娘ミニの足

軽装の女が春をつくるなり

大阪市 河井庸佑

同じこと聞いてわかる子わからぬ子

持ち味を発揮せぬままうずもれる

時差出勤できる身分が羨まし

八尾市 古川鶴声

照る照る坊主作り明日への準備する

職場から子供抱えて妻を呼び

逆か夢と言われて気持ち取り直し

大阪市 今西章雅

信仰家神の試練と病んでいる

洋酒も棚も贈りものらし課長宅

云う事を聞かぬ子ですと育てとき

兵庫県 河原みのる

稲作付転換

長らえば米作るなの御代にあい

日ソ漁業交渉

タラバガニ横バイで無理押して来る

人命補償セパードの値にほど遠く

岡山県 坂井三葉

二兎を追う若さだけをうらやまれ

雑音の中から私の音をより

日本に治外法権のある怖さ

倉敷市 小幡里風

行動派の靴がちびてる敗けている

風呂敷を一つ男が海に付つ

雨続く窺いてみたい雲の裏

宇部市 平田実男

嫁の荷が届き息子が他人めき

人工呼吸続ける親の手が必死

清い恋続けて愛を疑がわれ

富田林市 浅川八郎

終焉の清めの方を遺しとく

権原神宮参拝(二句)

着物やとみくじひく気になるらしい

何を祈念孫の柏手三才です

高槻市 山田季賛

貨車通過工事場汽笛で念を押し

トンネル工事やっぱ雨は困ります

サーカスのよう高職にあるほこり

和歌山市 垂井葵水

伝来の暖簾たよりの代がわり

雛祭る子には届かぬ手の高さ

兵庫県 大江秋月

雁一列空にも交通規制あり

参観日ママには椅子が小さ過ぎ

受験の子見送り言葉足らぬ悔

伝言板デイトは小さい文字で書き

久留米市 永松道雄

晴着着た同士互いに振り返り

総入歯吾が人生の総仕上げ

竹原市 小島蘭幸

急襲へどうにもならぬ密造酒

玄関へつつ立っている純情さ

一万羽飼育寿ぐ東天紅

釣れませんかあと隣とうまが合い

大阪市 吉岡美房

素晴らしい一日ポカンとして過ごし

駐在の署長代理というお顔

堺市 新谷笑痴

世間ではヒモと呼んでる代理人

積立をあざけるような地価を聞く

真っ先に歩は殺されるためにあり

非常口開いても安心出来ぬ宿

和泉市 西岡洛醉

セールスはノルマへ靴の紐を締め

大惨事人ごとでない国に住み

和歌山市 土谷城石

口論へ猫う散げに腰をあげ

八人も育てて傍に誰も居ず

苦労性ですのと女手をひろげ

時計より腹の加減で見るお昼

加賀市 細呂木魯木

只一枚もれた伝票でひっかかり

人恋し口実探す個室病み

富田林市 岩田美代

双生児の親苦にもせず二つ買い

ひょいと溝またぐみたいに事を決め

元日の忘れを旧正の神頼み

毒舌にねぎの薬味のような味

大阪市 宮地双楽

愛情の編みさしが片袖のまま

従順さを教育ママは置き忘れ

京都市 松川杜的

恵まれた過去に未練の斜陽族

那智山

印肉の乾く間住職の話好き

谷汲寺

満願の響とも思われる鐘の音

六角堂

へそ石を撮つす角度へ鳩が来る

大阪市 宮尾 あいき

水盤の松は添花三度更え

新調に化けるペンキの貸ポート

二つ若く見せる鏡へ小半日

熊本市 楠田 英子

人の世の涙こうまで味があり

闘病へ仕事の鬼の目がなごみ

恋愛の花は遠くの方で咲き

岡山市 川端 柳子

着こなしも上々人形出来上り

人生のつらさ坂道越してから

札幌の雪まつり

今着いた雪も混えて雪まつり

岡山市 池田 古心

舞台裏三人寄っても案が出ず

ニンニクの口を嗅ぐよに医者のおぞき

姫路市 隠岐 不酔

旅先のたより私に様をつけ

石投げる衛も習うて法学士

大阪市 川口 弘生

ソゲ抜きで抜いてお医者さんらしくなし

帯もろて着物もショールも買わされる

松江市 岡崎 祥月

兎も角もその場をつくるだけの嘘

ふり出しの人生定年からのもの

八尾市 高杉 鬼遊

中華そば経済的な恋となり

神頼みする祖母嫌う受験の子

松江市 柳 楽鶴丸

自然の法則にさかろう独身主義

「もしも月給が上がったら」はかないサラリーマン

鹿児島市 土岐 トク子

ハプニング子の演出にうろたえる

四面楚歌しゆうとは止むなく土俵下り

泉佐野市 大工 睦夫

肉体美ズボンに物を云わせる気

爪弾きで妻は夜長の間を埋める

★ 西尾 栗

古代裂れに似て北山時雨るるよ

あほくさとも言わず炬燵を猫は出る

スランプはスランプ消息欄を先に見る

手袋の指先切った賃仕事

壺焼へ指さす島は霞んでい

北川春巢

市民の足のバス閑散時途切れ勝ち

年寄りへ歩道橋またひとつふえ

技術屋は技術屋として人生観

金貯めるばかり心の貧しさよ

よろめきながら来た春へ旅プラン

若本多久志

モーニング着てから口上教えられ

冬山のポスター遭難もありと書け

おとぼけという妙手あり浮世なる

老いぬれば夫婦喧嘩もいく久し

まだ夢があり金婚の年を繰り

菊沢小松園

生きて行く為めのルージュと子は知らず

空いているバスでアベックと言うかたち

並行線と悟り笑顔を交すだけ

手応えは女中も女将も顔見せず

散り急ぐ花を造花のけなるがり

清水白柳

そのあとの微笑やよし君の瞳も

核のせいだろか天候不順だね

桜井六華氏を悼む

古柳誌に名前を偲ぶだけとなり

ああ 十九平さん

豪快な話題冥土へまでも持ち

川村好郎

自惚れと自信が心をゆききする

昨日を忘れ今日をゆるして夫婦なり

逃げているうちは苦勞追いかける

人生暮色ねばって来た誇り

伊予緋妻へ撰るのも旅なれや

岡山県 故服部十九平

遺句

(二月十二日) 着便

靴みがき旦那へ社会党を説き

せめてもの虚勢桓根を高くする

米塩の資でない別なゼニが欲し

テーブルを叩けど拍手湧いてこず

童話では中間派など許されず

公害に鳩首協議の寺の棟

神様のようなお方と馬鹿にされ

松葉杖右だけ軽い靴を履き

塩加減電話で実家の母にきき

呉越同舟メンテールは座が白け

川傍柳 初篇研究

(七十)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義故 高須唾三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

546 関屋の巻を読みかけて灸をすへ

車弓

岡崎「四火の灸をすえるまで読みかけていた「関屋の巻」は、源氏物語の一帖。蓬生の巻と絵合の巻の間にある。劳咳のセキにかけた秀句。ひっそりと部屋にこもって源氏物語を読んでいるようなのが劳咳にかかるわけだろう。

藤井「源氏物語をもってきた綺麗な句。上流家庭のお嬢さん。

高須「関屋と劳咳の咳との秀句ではあるけれど、源氏物語は当時にあつては唯一の艶笑文学、それを劳咳女史が読んでいたというところに、何かあわれなカゲを感じる。

前田「句は平凡。

十九帖目を読みかけて床につき 傍二・4
若菜の巻を読みかけて床につき 筈二・13

丸「礎稿賛。藤井説の通り、いかにも箱入り娘の感じがする。

岡田「賛。

547 白壁を見るとめめ出す旅婦り

五連

清「旅に出ていた亭主、久しぶりに帰って来たが、壁を見ると何やら落書きがしてある。よく見ると相合傘の下に女房の名前と男の名前。さては留守中に間男でもつくったかと騒ぎ出す。

藤井「旅の留守の間男騒ぎは川柳によくある所。ここでは連れの男が親切にも発見して、おしえたのではあるまいか。

高須「どうも古句の表現には、わざとではないらしいが、こういう過去・現在・未来のハッキリせぬ語法がある。「見るとめめ出す」という言い方は我々だと刹那的な感じしかうけぬ。

旅婦り不機嫌な顔気にかゝり 一五・5
の女房は、後ろぐらい所があるらしい。
前田「礎稿に賛。「白壁を見ると去り状ぶ

つつける」(二一・23)

丸「同。この白壁は近所の土蔵などの白壁であろう。「と」は……とともに、……と同時に、といった意味の助詞ですからそう不自然にも感じられぬ。

岡田「礎稿に賛。

548 夕立最中たのんましよ

五鳥

清「夕立の最中に来客の声。その声をよく聞けば最近無沙汰ばかりしている知人。さては夕立にあいよんどころなく傘を借りに寄ったか。

藤井「たのんましよ、たのんましよ」であわていそいでいる風がよくでている。

川端「濡れにぞ濡れて頼んましよ、頼んましよ」(筈一・38)

高須「傘借りに沙汰の限りの人が来る」(初・35)「近付きを考えている雨宿り」(三・26) 現今でもあることである。

丸〓贊。句の表では藤井説の如く、出て見たら沙汰の限りの人か、それとも珍客か。

岡田〓諸説につく。(今なら俄雨にであつても、タクシーを利用したり、デパートに逃げこんだり、喫茶店に飛び込んでやむのを待つ手もあるが、そういう便宜のない昔は想像以上に困ったものらしい)

549 薄雲ハ又候下駄のもゑつくろ

門柳

清〓すでに出了伊達綱宗と薄雲を詠んだ句

薄雲が座敷は伽羅で蚊をいぶし 五・12

薄雲の時にはたゝの御下駄なり 第三通3

などの類句がある。

藤井〓「又候(またぞろ)」は又そろそろか。下駄のもゑがわからぬが燃えとする。

「つくる」は「つくる」ではあるまいか。

そうきめて我流で解すると、高尾も死んだ二度目の薄雲太夫に仙台候が通いつづけたから、そろそろ立派な下駄……二代目の伽羅の下駄が、また豆腐屋に燃やされる頃だ。とにかく下五字がわからぬ。

高須〓「もゑつくろ」は「燃えつ杭」で、焼けばつくいは火がつきやすいのたえをとって「又候」がきいたわけ。

薄雲は当世高尾は古風なり 二四・22

は、薄雲は高尾のような古風な意地はもたないことを言ったもの。

薄雲をたなびかせたは二度のどら

五 11

薄雲だからふうるか初手思ひ

傍 29

薄雲は陸奥と名をかえたがり

前田〓「又ぞろ下駄」「燃えつ杭」がわからない。この句当時の流行言葉をもじったものか。

丸〓「又候」は又しても、又もや、ふたたびなどの意。「もゑつくろ」は高須説の通り。この句表現に無理があり「燃えつ材に……」のことわざの採用も誤っており感心できない。強いて解するなら、伽羅の下駄で高尾に通いつめた苦い経験があるのに、

又しても薄雲に通いだした。一度覚えた遊びの味は、焼けばつくいに火がつき易いというたえにもれない。

岡田〓丸先生の解の通り。

550 寄合へ四八斗りの娘来る

一甫

清〓「四八ばかりの娘」は、四掛けの八は三十二許りというような、年とって婚期を逸した娘。こんな年増の娘だから、家人に替って寄合などにも顔を出し一人前の意見を述べる。

金つ食四八ばかりの娘なり 第三・17

藤井〓お留守居役の屋敷の寄合へ三十二才ほどの振袖娘がよばれてきたのであろう。

町内の寄合にオールドミスが、親の代理で出るわけがないから。

川端〓藤井説贊。「寄合」は集って相談すること、ここは芸者でも呼ばうと相談がまとまって、三十二才ぐらゐの踊り子が来たのであろう。

高須〓寄合は集会のことだが、ここは御留守居衆の例会、別に大事なこともないのでお酌に踊り子が呼ばれる。それが「四八三十二」ばかりの踊り子だというわけ。

踊り子におどれと留守居むりをい、 一七・41

前田〓礎稿贊。お留守居衆の寄合とまで考える必要はないと思うが。

丸〓お留守居茶屋の寄合に、年増の化け娘踊り子が呼ばれて来たのである。

岡田〓大名のお留守居役は外交官。他の諸候の留守居役と打ち合わせの外交的な仕事と称して茶屋に集まり酒宴を張った。それを「寄合」といったのである。いわゆる社用族で、藩の金を酒手に使った。その寄合の席に踊子(今の芸者)などを必ず呼んだのは、現代の政治家などと同じである。

「四八」は、二八〓十六才ぐらゐの娘……をもじったので、二八にあらざる四八ほどの大年増の娘(振袖を着ていたから)と皮肉った作。

花

の あ る 句

正 本 水 客

散りしく梅を座ぶとんで払うぜいたく

丹生川の支流に架かる長い橋を渡ると小径は小高い丘のなかへ分け入っていく。梅樹一万と云われるここ吉野村賀名生（あのう）の里の春はおそい。桜と見まごう薄紅の花が多い、道端に山の苗木など僅かな土産物売を売る少女も何となく人馴れず、お帰りにどうぞとばかりかむ。梅のトンネルのなかを上りつめた処に、お眺え向きの茶店がある。立ち止るとまだ少し肌寒い。陽当りを選って、あるかなさかの風に散り敷いている花片を薄い座布団でまわりに払って座をしめる。ふとんの下に敷いてしまうには、余りに惜しい風情である。稜線に沿って径を辿ってゆくと、この辺り古い椿の木が美事である。

落ち椿 天誅組の息吹して

村上天皇の黒木御所跡も近い。

×

鳥羽伏見の戦の地に近く御香宮がある。鍵形になっている庭の遠州作と伝える美事な石組みや、有名な所がらの藤の話よりも、縁側

に据えられた由緒ありげな大きな手水鉢が静かに雲を映しているのに心ひかれる。近よってみると一輪の椿の花が重く沈んでいる。それは古い昔から静まりかえっているように、大きく動かない紅の色が眼の底にやきついた

大手水鉢に沈み 椿の紅おもし

少し離れた一室にくつろぐ、こじんまりした石組の美しい庭であった。その右手奥にひと本の美事な八重椿が咲きほこっていて、下は春の陽も透らぬほどに重い花卉が散り重なっている。

散り椿 散りしく下は陽のかげり

そして女王に仕える女官達のように山吹の色あざやかな黄が取りまいている。

八重椿 山吹の黄に負けじとす

×

京の時代祭で知られる平安神宮、朱丹の柱瑠璃の瓦、白亜の壁、王朝文化の夢を訪れる人にみせてくれる。朱塗の回廊から裏手の神苑に這入ると、散歩に私の足は釘付けになった、ハッと胸をつかれる思いである。

辺りの空気を匂わせる様に立並ぶ枝垂桜、梢から足許まで紅い花におおわれた枝が、しなやかに揺れて豪華な花の玉すだれをかける。まことに絢爛華麗とより言いようのない美しさである。

花の化身か 近づく人をしさらせる

川端康成の古都にも出てくるし、谷崎潤一郎も紅しだれと呼んで作品のなかに書いている。余りの美事さに翌年の四月、家族も引連れて出掛けたが、まだ蕾の固さを見るだけであつた。その翌年は氣候の加減か、花の付きが悪く見栄えがなかった。花ひとつ見るにも、あらゆる条件とタイミングが必要なることを思いしらされた。

×

絵葉書の通り渡月橋 春になり

嵐山は本当に絵葉書の通りに桜が吹く。春の雑踏をのがれるように、野々宮の手前から小道を折れて行くとも木立の中に大河内山荘がある。大河内伝次郎が生前、私財を投じて自然のなかに造った庭園と山荘である。裏山の頂きあたり、木の間隠れの枝折戸を開けて出てみると、真下は大堰川へ逆落しの断崖である。上流の保津川が大きくカーブしてくる辺りが遙か花吹雪のなかに光っている。全く絵の様なという言葉は、この景色のためにあるとも思える。下ってくる櫓の音がギギッと風に乘ってきて興を添える。

×

六道湖畔から中国山脈へ向って暫く南下したところに木次の町がある。観桜句会に招か

れて始めて此処を訪れたその朝、2キロにわたる堤防の桜が一時に開いた美しさに驚いたことがある。夜はボンボリのはいった花のトンネルを歩くのも楽しい。両側から差し交した枝が幾重にも打重なって、花の白さが無限の厚さを持っているようにも思えた。

花のしろ 夜空に深く動かさる

木次から車で更に半時間余り、ひの川の上流に湯村の温泉がある。透き通った湯が溢れている真昼の窓を開けてみると、暖かい陽射とともに辺りのさくらが、ひらひら、ひらひらと湯槽に散りこんできた、ひなびた風情である。

さくら透く陽が湯槽までこぼれてき

暮れきってバスの運転手も話好き

歌に知られた安来に近く、すっかり暮れてしまった川沿いの道、闇になれた眼に驚の湯の明りが飛び込んできた

雪洞とさくら 夜は古木に見えてくる

宿の前の桜並木はぼんぼりの灯りに妙に艶めいて、桜の木も時代のついた古木の風格を見せる。もう少し遅う御座いますしてネと 宿の女将が何時の間にか後に立っていった。

散りそめを詫言る老女は花の下

城崎温泉を出外れると汽車は香住海岸に沿うて行く。日本海の波を真下に見下す四十メートルの高さに、日本一とか言われる余部(あまるべ)の鉄橋が架っている。まともに受ける海風にさからう崖際、目を見張るような

山桜がたった一本、列車に一瞬のうちに通り過ぎてしまつて、あとは訪ねる人もない。桜にとっては何の関りもない、或はこれが幸さ

花

なのかも知れないとも思う。
山ざくら見る人もなき崖でよし

水 粉 千 翁

「ハナ」「はな」は「花」である。その花を「鼻」につなぐと「狂句」なるものになる川柳今日の遅れは、何代目かの不肖者川柳が

川柳を狂句に導いた結果にほかならない。日本語を便利に逆用した憎みても余りある「指導者」と云わなければならない。その指導者の墮落も、井上剣花坊等、川柳中興の士が現

われるに及んでそれが救われたのである。そして今日の隆盛を見るに至った。勿論路郎、水府の受け継いだ川柳精神の普及は、近代川

柳への道しるべとして燦然と輝くものと云わなければならない。どの世界にも指導者たる立場の苦しみはある。指導者の重荷に耐えねばならない宿命に似たものがある。しかし、それを耐え抜いて来た路郎、水府という偉大なる指導者にこころよい感銘を覚える。再び狂句なるものの許容に走ることの断じてないよう警戒を惜しんではならない。特に指導者

というものの立場においておやである。それは如何なる美辞麗句をもってしても擁護しようがないからである。

肩を組む柳人の心は川柳の心である。しかし句作の中には寸分の妥協も許されないことを我々は知り尽して川柳の道を歩んでいる筈である。

花の特集はこのようない見横道に外れた論旨に始まって、読者の唾然としているさまが目に見えるから私は愉快である。

即ち、さくら花の心は川柳の心でなければならぬと云いたいのである。蕾から花も色も香りも、その環境も、散り際もである。そして久遠の詩を奏でながらくり返し四季の中に咲く春への風情。それはすばらしい人間詩と汲めども尽きぬ情感と、更に偽れぬ現実性をもった人間哲理を示しているからである。

日本の、日本人の花は今後断じて狂句が如きものに染めさせてはならない義務を我々は感じなければならぬことを重ねて強調したい

重箱の高さは云わぬ花吹雪

私の川柳初期の頃の作品である。さくら花の心を詠んで人それぞれのくらしの高さ低さへ無表情の表情によって降りそそぐ花の心を詠んだのである。

桜は古今その散り際のいさぎよさを数多く詠み尽されている。私もその心に触れることがある。

偽りの云えないままに花は散り

本懐を花は男の貌で散り

この辺りで花の視野を大きく広げて、つれづれの花にピントを合わせて見るもよからうたんぽぽとすみれ雲雀へ向いて咲き
大人が童心になろうとするむつかしい味わいであります。

貴女のきびしさに私の詩魂をゆすぶられました。

あり余る枝へ思案の花鉢
広々とした自由詩川柳はこれなるが故にこそ、こよなく愛する人間詩である。

紅椿散るにはあらず恋ボトリ
紅椿落ちた構図の紺紺

首をひねる読者がボツボツ出て来そうである。

コスモスの辺りは風のあるそう
私は曰く、川柳の奥の細道なり、と。

嫁ぐ娘のうわさはなむらさきにゆれ

川柳ですかの問いに即答に詰った句である
くれなゐの花の呼吸に目をつむり
ますます佳境？に入ります。それでも私は
云う。これは狂句ではありません。と
沈丁花ゆらぐ一人の闇でよし
川柳を愛するの感極まる場面に到達する句

酒

の句について

浜田久米雄

境であります。そして、
花名刺男のひとり言を聞き
に至って、それは花ではないの声しきり。
「然り」。しかし見給え、川柳課題「花」は
かくの如くして無限の視野を提供して呉れて
いるではありませんか。

酒の好きなばくは飲みだしてから四十二・
三年になる。この間に飲んだ酒の量を計算す
ることはおそろしいことだと思ふ。これを四
斗樽にして考えて見ると全くあきれかえるこ
とだろう。今でも月に一斗は最低であるから
年に四斗樽を三つころがすことになるのでそ
れに四十二を掛けると百二十六樽これが最低
であるから百五十樽位になるかもしれない。
酒が好きなだけに酒の句も随分作って来た
また酒のとりことなるか花だより

久米雄

の句はさくらが咲き出すと毎年思い出される
句だ。勤めていたころはグループごとに花見
があるのを、日を変え場所を変えて数回にわ
たって続けられるのであるから終りの方は小

便でもしにゆく振りをして逃げて行ったもの
だ。いくら酒が好きだからと言って連続の花
見は思い出しでも大苦勞であった。路郎先生
の「酒とろり」の句、蔑乃奥様の「のんで欲
し」の句はあまりにも有名であるがばくの家
に路郎先生の短冊がある。

まっ先にあるく路郎は酔っている

路郎

これは大分前の句で先生がばくの家へ来ら
れた時、書いてもらったものである。お元氣
なころの先生を思い出しては笑ましくなる
句だと思ふ。昨年亡くなられた三太郎先生の
句

酒よろし酒に極まる日くれがた

三太郎

の句があるが酒を好まれた先生の面目が躍如としてゐる。

ぼくは盃の小さいのでちびり、ちびりやるのがあまり好きでないのです。こし小き目のコップに酌い、何べんかで飲むことにしている自分の適量はおよそわかっているから小きなので何べんも飲むより大きなのでやる方が面倒くさくないし落着いてやるからだ。

妻も子も酒量のふえたのを案じ

没食子

妻子に心配をかけまいとする気持は多分に持っているものの、ムードの良さなどに支配されてついやり過ぎすことも度々ある。この翌日は大いに反省はしているがなんと言つても酒は魔者である。魔者に魅せられた酒のみの根性にはほとほと愛想が尽きる。なるべく「やめてほしい酒」にならぬようにしたいものだ。

酒飲みのシャツ一枚を買い渋り

静馬

シャツは代表的なもので買物に行つて上等な物を買わず時には値切つたりするのだから一杯飲みに入るとそうはけちけちしていない。一杯か何杯かになつて上等な品を買つた何倍かの金が酒のために払われている。それで満ちて帰るのが酒飲みの悪い癖であらう。

きき酒のもつたなくも吐き出され

恵二朗

ぼくも二回程きき酒の機会があつたがあれは全くもつたないものである。含んで味わい吐き出して水で清めて次へ回る。きき酒の

酒は極上のものばかりだから余計にうまく余計にもつたない。ぼくははじめのうちは吐き出してゐたが真ん中辺から吐くのを忘れて胃の中へ吐いた。おかげで終り頃は陶然とした経験を思い出した。

都合よい事に親父は酒が好き 蘭幸

ぼくの親父も酒が好きであつた。時折帰省した時父と飲み交わした酒はまた格別であつた。息子の話、飲みつ振りに目を細めて相手をしてくれた今は亡き父をなつかしむのであ

我が墓碑に無名の酒徒と刻むべし 伯峯

酒

水谷竹荘

「灘の生一本」とは、兵庫県の酒のことである。これは武庫川河口から半田川河口の間でつくられ、このあたりを「灘五郷」といわれている。

昔から「酒は飲むとも飲まれるな」とか戒めの言葉もあるけれども、つとめを終えて毎晩飲む晩酌の味は忘れられない楽しいものである。

まだ何かないと晩酌酔うていず 竹荘

伯峯も酒が好きである。彼にしてこの句あり愉快である。

振り返るわが人生に酒と川柳とがあつたために面白く過ごして来た。これからも愉快に過ぎてゆくことであらう。酒は飲むものでけつして飲むだけではならぬとよく人が言う。これはまことに結構なご注意ではあるが電柱へしんから酔うたのがさばり

久米雄

のような光景が未だに見受けられることであらう。時には飲まれて正体を失ない人生の憂さをふつ飛ばしてもよいではないか。

酒の肴がうまいと、つい一本から二本と、盃の数を重ねる、その酔心地のよさは、路郎先生の句

酒とろりとろり大空のころかも 路郎

なのである、また酒の十徳として「百歳の長寿命を延ばす」と、その功德をたたえている明治、大正、以前の日本人は「人生五十年」と観念し、七十まで生きると「古来稀なり」を感嘆したものだ。西鶴は、五十二才で死ぬ

時「人生は五十年のきわまり、それさえ我々はあまりたるに」という前書で「浮世の月見すごしけり末二年」とあきらめきった辞世の句を残しているし、芭蕉も三十代で翁と呼ばれ、五十一才で死んでいる。それが現代では人生七十年となり、「人生九十古来稀なり」と二十年のびたのだから、めでたいことである。それを酒がなお、めでたくしてくれる。

正月を酒がめでたくしてくれる

元日も盃をもち筆を持ち

鞍馬 鞍馬

年は年齢とも年齒ともいい、元旦から大晦日までの日数を一単位として一年三百六十五日、月日の立つのは早いもの、四十にして惑わず飲むのは強壮剤だといつては、やはり酒好き酒を飲みである。

呑んで欲しやめても欲しい酒を酌ぎ

胡瓜もみ出来て主待つ薄化粧

竹 莊

妻にとって一番嬉しい家庭平和の時である。

女のいない酒はさびしき

路 郎

男の世界ではやはり、交際とか色々の宴会とかで

指名料とられてまでも逢いに行き

竹 莊

昔、女給商売さりとやめてという唄が、流行した頃もあったが、今では名前が変ってホステスになった。

ホステスの世辞上まわる客のうた

秀 子

指名した女向こうで飲んでいる

圭 都

遊ばして飲ませてバカな指名料

清 風

酔うてもお女将計算間違わず

竹 莊

沼畔氏がこのたび「酒の句集」を発刊される

川柳日記

一月の句

麻生 葎 乃



杉暗らく鹿はセピアの奈良へ来て
土黒々とのぞく豆の葉
寒椿葉屋の人もひそと住み
鳩か鳥か勾配のきつい屋根
犬吠える塀 小走りになる散歩
増築へ鑿は生きんがための音
豆歌手の社交辞令を聞くテレビ

ことになっている。

その本の序文の中から故川上三太郎先生の酒の句を二句頂いて転載させて頂いた。

酒よろし酒に極まる日くれがた

三太郎 酒、屋台で飲むコップ酒、料亭の樽詰の酒

酒とろり身も気もとろり骨もまた

三太郎 酒、白酒、養名酒、等々、その題名によって酒の句も違って来る

最後に沼畔氏の酒の句三句を頂く

三太郎 酒、白酒、養名酒、等々、その題名によって酒の句も違って来る

御先祖はよくぞ遺したうまい酒

沼 畔

お互に連れぬふところ当てに飲み

同 同

酒の句も、色々の酒の題名によって、その

同 同

感じかたなり、考えが違つて、句にも変つた

同 同

千差万別の句が生れている。冬の寒い時にた

同 同

★NHKラジオ第二放送「老後をたのしく」の座談会に、西いわを氏（羽曳野市同人）がゲストとして出席された。四月一日午後二時から生々庵主幹の選評発表後再放送される。

安亭氏を悼む



工藤 甲吉

同人の工藤安亭さんが急逝された。私たちの横つ面をガンと張り飛ばし、そのまま振り返ることもなくさっさと極楽へといったところ。全く啞然そのものである。

一月二十九日午後五時十分、食道静脈瘤破裂で逝ったのであるが、発病前日の二十六日は、好きな相撲の千秋楽をテレビでみながらいつものとおり軽くビールを飲んで何事なかったというのだから、人のいのちなんて、はかないどころか「あきれた気まぐれもの」である。

電報に受話器を持ちながら、しばし足のふるえが止まりませんでした、という不二田一三夫さん同様、私も新聞社で仕事、急を甥御の波多野五楽庵君から電話で知らされ、一瞬、絶句した。

「ひらない」誌七十五号の「柳言日語」で

巨星・川上三太郎先生の死を悼み、「その温顔すでになし、我々はその教えを伝えることを誓う。先生を弔う言葉としては舌足らずではあるが、どうぞ御安らかに御冥目遊ばされるよう心から祈るものである」、などといったおられたのであるが、それがそのまますっかり私たちが当の安亭さんへの弔詞となっていました。実になんともやりきれない思いがする。

安亭さんは、年令（行年65）の割りに柳歴は古い方でない。といっても満州引き揚げ後の二十四年、歯科医院開業の地である青森県東津軽郡蟹田町で漆戸凡々子、杉野十佐一さんらと、「おかしやうき吟社」を創立以来というから二十年にはなる。そして二十五年、蟹田から同じ陸奥湾沿岸の同郡平内町小湊に移転開業、三十七年に船橋三郎、横山幸坊君ら同地の柳人七人で、川柳「ひらない吟社」を創立、主幹となり、柳誌「ひらない」を発行したから、川柳への努力と貢献はけだし大なるものがあつた。

川柳の道にいそしむ者の幸福を常に謳歌し新人の育成はもちろん、自宅には川柳道場までつくり、句会には夫人以下一家をあげて献身し、また長男、二男（翠亭・桐亭の両君）にもこの道を歩ませ、一方、一社の主として県下各地、吟社の句会に出席、交友をはかった努力には並々ならぬものがあつた。

元来、性温容、大人の風格を備え、来る者は何も拒まなかつたし、また後輩についてもいっさい干渉せず、右は右、左は左なりに歩

むにまかせ、それをじつと見守る、といったタイプの人だったのも何人からも好かれ、それが川柳の伸長にもつなげた。

弘前市の歯科医の草分がで、市会議長をした父の二男。東京歯科医専の卒で満州時代は佳木斯で三江市歯科医師会長、県人会長などした。学生時代は相模部の主将。満州では天童から教佐（師範）の称号を受け、同国角道部三江市副部長であつた。読書、俳句（以前）観劇、映画音楽が趣味。角力、野球、ボート（選手）、囲碁、麻雀が娯楽。酒（静かに飲んで歌をうたうこと。理屈や道理をいう酒は外道と信ずる）、たばこ、コオフィ（ただし本場もの）がし好。徹し切れずにブル人、自由主義を曲解した若い人がきらいなもの（二十三年の答え）、という安亭さん、その号がお客さんに「口をアーンとあいて」に由来するという安亭さんいままやなし。「邦光院安亭通悟居士」ああ。合掌。次は遺作である。

医師の私語独舌語なのが気にかかり

天皇の帽子も変わる夏の風

みちのくの夜冷えに荒れる居職の手

真心は人に負けぬが口が下手

ナイターと本場所居職手がお留守

日曜の廊下静かな休診日

独り来て旅愁果てなき天の川

午前二時母わざと錠かけ忘れ

還暦の日を働けるありがたさ

（新居落成一周年）

一城の主となつた旅鴉

秀句鑑賞

…前月号から…

新調の靴が離農の足を噛み

坂井三葉

離農という重大な社会問題を新調の靴によって諷刺しているのは作者の手腕であろう。穿き馴れない靴にその青年の将来を暗示させているのも面白い。

つり革へ言い負けてきた口喝き

有働芳仙

言い負けて来た昂奮状態がよくあらわれている。つり革へぶら下りながら胸の奥からこみ上げてくる口惜しさを口かわきという生理的な言葉で結んでいるなど凡手ではない。

りきゅう下駄けな氣に生きる響きか

谷垣史好

この頃の若い人には利休下駄などというものは余り馴染がないだろう。最近では殆んど中年以上の女性で水商売の人が履いている。だから作者がけな氣に生きると詠んだのも、む

清水白柳

べなるかなである。

三カ日晴着に似合う顔がない

戸田古方

この句の鋭い風刺は見事である。決してこの晴着の主がみにくい顔だというのではない。改まった顔で新年の挨拶をのべるおかしさを穿ったものである。

コツコツ出勤の猫背が硝子にうつる

つる

西尾 栗

意識するとしなやかかわらず、ある年輩になると猫背になりやすいものだ。コツコツコツという音感によって出勤する姿を感じることが出来るし、硝子にうつるというのも作者の主観だ。そこに一まつ of 哀感がある。

翼切られても鳥の瞳は空を見る

八木千代

こうした心理的な句の解明は書きにくいも

のだ。鳥の本能を借りて人間の本能を詠んでいるのは作者の手腕であるといえよう。

星と私語できる倅せ山に住み

浜野奇童

この作者は山里の学校に勤務して居られるのでこの句が生れたのである。星と私語という感傷的な句語も作者がそれを倅せと詠んだことによって生かされているのである。

笛吹けどタクトも振れどふり向かず

岩田美代

自分の心境をだれかに判ってもらおうとしても、言葉では言いあらわせないことがある。併しこうして句に詠むとそこには思いがけなく理解してもらえることがあるものなのだ。その振り向いてくれないのは誰なのだろう。それは作者だけが知っていればよい事なのだ。

人間の限界でワンマンバスうごく

樋口一峯

大阪では市電が廃止になってワンマンバスの路線がだんだん増えてきたのは周知の通りだが路線によっては前から乗って真中から降りるのもあってややこしいことである。この句はワンマンバスの弱点を、人間の限界だと詠んでいる。運転手さん御苦労させないぜい

安全運転でお願いします。

盗作もなく歌会忘れられ

横山 孜孝

川柳句会の課題と違って歌会の御題は一年前に発表されるのであるから、我々から見ると気の長い話だ。盗作問題のあった年だけはマスコミも騒いだが、そうでなければ気のつかぬ人が多い。来年の御題は「花」である。

無線タクシー怒鳴られ続けてつきに

けり

桑原シゲオ

人間の声というものは機械を通ると何だか変わってくる。金属音というのかキンキンしたように聞えやすい。殊に無線タクシーの場合は会社からの発信が命令口調なので怒鳴られているように思うのだ。この句のつきにけりはユーモアもあって面白い。

ぶちぶちと数の子お金をかじる音

宮口 笛生

黄色いダイヤという異名をもらった数の子も今年はいくらか価下りしたのか一般の家庭にも買われていたようだった。併し何といつても高価なので小さい粒の音がお金をかじるようだとはいっている。

筆の穂をうっかり甜めてそれを買

森田 布堂

自分の癖というものは仲々直らないものでいつものように筆のかおせをとると甜める癖が文具店へ来た時に出たのだ。もう少し細いのにしよと思ったが甜めたのを元へ戻すのも何だか悪い気がしたのである。作者の気弱い律気さをそこに見ることが出来る。

どの辺で落としてきたと子を叱り

西森 花村

落したところが判っていれば拾うてくるのだが、判らないから泣き乍らもどつて来たのだ。それを聞いただしている親の真険な顔つきまでを想像させて、ユーモアのある句になっているのは作者の人柄であろうか。

妻だけが染めて私に染めさせず

金井 文秋

夫婦の情愛というものは初老をすぎると淡々としてそして深いものになってくる。この句の場合も、私に染めさせずというのは勿論白髪染めのことなのだが、不平を言っているようであり乍ら決してそうではないところに心の通い合う夫婦の温い心があるのだ。

老妻病院

五十年同じ枕へまくら経

小川 静観堂

御令閨の御逝去に心から御冥福をお祈りし

たい。句というものは真実味がこもっていればぐっと胸をつくものである。この句の場合も、五十年同じ枕ということに真実味があるのだ。よほどこれまで一緒に来てくれたという作者の感慨が溢れているのが感じられる。

寄席

人気とは「めくり」見てさえもう笑い

不二田一三夫

めくりというのは演者の名前を書いたもので舞台の向って右手に置いてあったものが席によつては、くるりと廻るものになっているがやはり「めくり」というのであろう。舞台へ出てくればそれでお客は笑う芸人は多いが、「めくり」の名前が出ただけで笑わず芸人は数少い。そうした芸人は名人といえるだろう。

★

梅志さんが筆を取りにくいというので急に書いたために充分調べる事が出来なかった私の悪い癖が出て句の鑑賞になっていないと思うがおゆるし願いたい。

秋田実主宰・不二田一三夫編集

「漫才」

増ページしました
定価百円送料六円

発行所大阪市生野区勝山通六ノ七九

電話大阪(七七八)三二二八

路郎賞 川柳塔賞 中間発表

ご要望にこたえて二賞の中間発表をする
ことになりました。昨年十月号と一月号から
約十句ほど各選考委員から発表され、二月号
と五月号分は七月号に発表し、六月号と九月
号分を十月号に発表と同時に、二賞を決定し
ます。

路郎賞候補作品

北川春巢

やりくりが ついたか 又も法螺を吹き
辻々に 今なお貧しい村
共稼ぎ パパも つくれる乳があり
義理で来た見送りへ 汽車の出が遅い
橋渡し アフタサーピス うるさすぎ
献眼をした 目だ ウィンク などすまい
左遷の地 蝶ネクタイが 目立ちすぎ
フロイトが さわぐ おかしな夢ばかり
水虫と ストレスの まま退官し

酔 升
清 生
花 宵
実 男
十九平
恵 二朗
素身郎
古 方
没食子

干し柿よ都会のたより絶えたり

西尾

有名になって酔ってはくれぬ人
稲妻に平城宮跡の広さ見る
負けてから契約証書読み直し
控え目に塗れば唇マゾめいて
耳濡らす涙生涯仰臥の身
中尊寺霧が流れて鐘が鳴り
離別せぬ程度の喧嘩で子が育ち
まだ恋の目でないことがもどかしく
熱帯魚秋の思索か動かない
人類の太古もやはり石を投げ

若本多志

銀行も警戒をするゴルフ場
結局は釣書のいらぬ人へ嫁き
寄り添うて歩いてすでに恋でなし
父の歳より長く生き父を識る
落日の城壁ひとと葛からむ
誘い水ささねば水も出てくれず
背をむけて寝ても信じ合える仲
忍従の身に秋の風鞭となり
人生に狸寝もあり面白し
因果にも亀は甲羅を着て生れ

菊沢小

好きでこうなった姿の蠅取紙
コンクリートの不覚亀裂に花が咲き
因果にも亀は甲羅を着て生れ
我が影を写して水は流れない
蝶の羽根閉じて開いておもねらず

ひさお

栗

葵 春 水
法泉 子
古 方
薫 風
丁 路
旭 峯
一三夫
奈良子
鬼 遊
形 水
蘭 幸
梅 志
奈良子
藤 波
千 梢
小松園
没食子
桂 仙
松 園
曉 童
千 翁
桂 仙
水 客

磨かれた伝統の味



司子集柳

鶴屋八幡

本店・大阪市東区今橋5・電話(203)7281
東京店・東京都千代田区麹町2・電話(261)3996
売店・各百貨店のれん街

川村好郎

もみじ葉にすれば尽きんとする命
泥んこの過去があるから今日がある
愛の証しさぐれば揺らぐばかりなり
なに考えていたのかわが家通り越し
気休めとわかる言葉を置いて去ぬ
善意だけ見る習慣に生かされて
シャボン玉大人が吹けば淋しそう

水 車
恵 二朗
奈良子
一三夫
水 客
野迷路
酔 夢

土壇場になって他人にまた戻り
汐風の執念松を地に這わせ
おもわくのそれぞれ充てり花と蝶
雑布のついでに掃除器拭いてやり
争うているとは見えず蝶二つ

十九平
恵 二朗
奈良子
布 堂
日 満

彼岸会の無音無明は亀にあり
ええかっこ云うなともうひとりの僕
子に覗きこまれるとこに母が居る

川柳塔賞候補作品

戸田古方

ざくろ裂く指は男に見せまじき
かかる時みんな独りなのに気づき
申訳なさそうにいる雲一つ
ブルドーザーこんな音して生れしか
明日にかけ明日にかけて半世紀
誰も見てないと思うた大あくび
あてのない道でばったり昼の月
初めから負けて笑えばほめられた
レンコンの穴の配列他意はない
親切がある日利巧な悪にみえ

正本水客

よいしょと立てばよいしょと猫も起き
やけくそで歌っているんじゃないらしい
あつさりと折れてますねとレントゲン
さよならと手を振る格好祖母は逝き
終い風呂溢れ洗濯したくなり
水を撒くホースを下げて今日わ
俸せが消えそう貝殻に手をふれず
見えぬから欲の範囲もこれっぽち
ふるさとの天気予報も見逃さず
最果ては此処までと溝が押している

薫風 史好 千翁 不朽 菁居 一路 鱗魚 亜也 正朗 志津穂 惠汀 空白 空

秋風の姿かたちを舞う尾花
小父さんと呼んで警戒して呉れず

市場没食子

狭い視野ながら母の目ゆきとどき
歩道橋つくづく齢を思い知り
云いわけを聞けば負けそう受話機おく

捨て切れぬ過去よ女は弱いもの
燃えつきるいのち粗末にまた怒鳴る
観賞の花 蜜蜂を寄せつけず
張り合った恋上背のたざざりし
現時点子供産めぬ共稼ぎ
かかる世に戦陣訓のような社は
まだはずむ息へからんだインタビュー

清水白柳

ごちやませで父おもしろい千一夜
棺覆うて評価を受けるもの持たず
俸が消えそう貝殻に手をふれず
対座して激しき鼓動きみのもの
みほとけも私が泣けば泣いてはる
ざくろ裂く指は男に見せまじき
灯を消して女蛇精の媚をもつ
オガ屑も木曾や秋田の香を残し
闘病十年誰れかの植えた柿がなり

白汀 和久 映月 千代 芳子 痴亭 葉朽 不魚 利美 鎮也 惠汀 白子 紫子 不子 二三枝 志賀夫 若芽 正風 正朗

橘高薫

彼岸花父の墓には赤すぎる
これは無形文化財のようなやとな
幸福を逃した朝も化粧する
工場が昔来えていたボブラ
向日葵の花より低いマイホーム
ガラス這う雨をみつめる夜の顔
運のいい子で東大を去年出た
伊勢エビがにわかに動く何思う

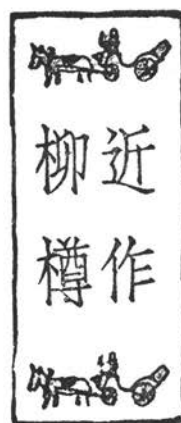
編集部から― 選考委員の方は、原句どおりにご発表ねがいます。ご自分流のかなづかいになさるぬように。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5
TEL 03 (733) 6951
守口出張所 守口市京阪本通2-18
三洋電機株式会社食堂内
TEL 06 (991) 1181 内線 588

豊平次 欣一 千歩 白汀 大夢子 タカ子 千代 章



菊沢小松園選

米子市 八木千代

諦らめるべきとトランプにも言われ

知っている筈の噂に触れて来ず

散るまえのはなびらに似た夢と居る

相愛のままでモラルにへだてられ

翼もう忘れて母は果をぬくめ

姫路市 前田 芙巳代

秋天の月に告ぐべき恋の結末

夢を売ります乱せない列

深夜喫茶で発酵する獣の体臭

手を放てば碎けるグラス 愛です

うまく化けたのに鏡がおしゃべり

松江市 大峠 光春

太陽の彼方へ行こう虹を見に

春の風起こす故郷の耕うん機

くちづけの顔ともとれる水仙花

美しい樹水まさしく寒波の季

和歌山市 増田 志津穂

幸運の星とびこんで目がさめる

しめなわも疲れ果てたか横を向き

老松は素直に曲りひねくれず

花持てばプライド高く活ける我

島根県 小砂 白汀

弓なりに雪の重みをはかる竹

思うさま歩いて軌道を見うしない

芒の執念立ったままで枯れ

銀行を肥らせ策なき拱手

米子市 林 瑞枝

浮気など出来ぬ男に添うて無事

早起きの癖を旅館でもてあまし

さんびらを屋台で食べる里心

雪掘って掘って野菜の荷が積まれ

出雲市 王

紫

宝石の悲哀永住権がなし

続篇も続々篇もある絆

狂い咲き花から云えばこのチャンス

妄信の果に極楽鳥の夢

松江市 村

松 醉 歩

後進県銅像の数豊かです

百度石ガンと判っていても踏む

ラブレターハンドバッグを今はなれ

飼った手で埋めた金魚に雨が降る

島根県 堀

江 正 朗

用もない僕が一番先に起き

昼下りめざしの匂う日なたぼこ

本当はこうだと第二の嘘をつき

いらだちをあざけるようにオルゴール

島根県 堀

江 芳 子

見るだけの宝石あれもこれも好き

過去わびしたとえプラスになったとて

いらぬ事よう覚えてて叱られる

手伝う気とろろ摺ろうか見えぬ夫

大阪市 里

小 路

脚線は未だおとろえず市場籠

土地買えとセールス向う見ずに来る

暖冬の愚痴と灯油を置いて去に
散髪に行けばカゼひく程伸ばし

鳥取市 両

川 洋 々

泣上戸と知らずにいつて来た不運

飲むだけは飲んで無口は寝てしまひ

御主人のクセをネクタイまでが知り

貧乏に底などは無いものと同じ

和歌山市 ふきあげ

虎 城

他人の死式には喪章だけにする

式辞いもうそのくだりを声高に

アイシヤドウ素直な恋にしてくれず

お育ちのよさはわろてるだけの芸

大阪市 小 谷

葉 子

記憶をたどる恋の道すがら

傷心を装う人生に霧深く

明け放つ女の城に春の装い

愛久し両手で受けるみくじ吉

河内長野市 森 本

黒 天 子

もの思い若さが欲しいなと思ひ

よい女房になったと娘見なおさせ

もの思いにふけるに年齢が邪魔になり

東大阪市 落 合 思 月

角材をふりまわすのに要る学費

酒ぐせもよし頑固さも知って添い

泣いた日もあったが路傍の人となり

尼崎市 中 溪 慶 彦

女から折れる道理が気に入らず

正体はなんであろうと美女は美女

上からは睨まれ下から親しまれ

仙台市 平 野 光 道

春めけば恋しさつのる灯に独り

美人ではないがかわいい娘に育ち

貯金したボーナスあるうち病み続け

大阪市 黒 田 真 砂

淋しさを編む編棒の乱れ勝ち

冬空は無限私の小さな意地

寒風へ出るも心に燃えるもの

奈良市 桑 原 千 里

面接の答消しゴム使われず

車内吊り今日は細字の見える場所

流行が過ぎた頃から使い出し

八代市 船 木 史 朗

肚芸で済まなくなったスキヤンダル

日がたてばもう御遺族で見てくれず

故里の眼を避けて夜汽車にし

倉敷市 小 野 克 枝

子供部屋反省したと云う灯り

お互いに後悔口に出さぬだけ

燃えさかる心に遠きバレンタイン

大阪市 加 納 楽 々

なんだかんだと云ってて先に消え

子に負けて辞典にない字まだ探し

里帰り土産往復させただけ

守口市 岸 本 豊 平 次

鍵ッ子に秋の日空を染めて落ち

スモッグを知らぬ新芽は春を萌え

断崖の高さを知らずすみれ草

竹原市 生 信 笑 子

一本のアシゆれるなりゆれるなり

まだ落ちぬ柿へ拍手を送らんか

なんてんの朱にも雪のおしみなく

下関市 志 賀 木 石

非常口の近くを予約したホテル

手折らなんだ誇り七分と悔三分

しまい風呂天女の型で妻没り

竹原市 三 宅 不 朽

はじきマメ炬燵にかぎる子と妻と

恋序曲レモンスカッシュで別れ

善人の情性と知らず東ねた気

竹原市 脇 本 政 己

劣等感わく日風呂の湯溢れさせ

一心同体妻の下駄が履きにくい

日本の冬サボテンに手がかかり

竹原市 時 広 一 路

風の眼が小さな隙間見つけたり

たわむれる落葉へ箒追ってくる

さまざまな心へ歩巾ついてゆく

堺市 斎 藤 亜 也

革新派でも神官よんでお祓いし

勤めなき身にも心和む土曜

フト気乗り薄すに駅から引き返し

愛媛県 澄 本 満 子

飲酒運転拒みエンジンこねている

大器にはなれぬ心のこぜり合い

エリートのは誇りは持たぬヘルメット

岡山県 武 元 柳 子

捨てられる運命にある猫生れ

咳をして言いまがらして席を立ち

弁当箱だけの鞆をはでに持ち

呉市 榎 田 英 詩

ヘルメット脱げばやさしい父になり

云いまして出れば泣きだしそう空

事故現場カメラ無情に撮りまくる

和歌山市 飯 家 和 美

さぼてんの針のみ鋭し午後の雨

せめて雲晴れよ生活の重き日に

蝶つまむかそけき昇天憶いつつ

東大阪市 宮 西 弥 生

着くずれて晴着に遠い露路のひと

トランプで占う移り気の孔独

現実をまどわすネオンの色あやし

鳥取県 川 崎 秋 女

アイデアを生む奥様であきらめず

母と子の生活がかかる貝をむく

ひとところ開けて恋猫の戻り待つ

小松市 四 方 天 弘 美

ランドセル幼い夢の詰め切れず

ファイトをむき出しにまだ脈がある

関戸宗太郎氏を見舞う

励げましも笑顔にならぬ白い壁

藤井寺市 古 結 百 水

市場籠持ってロマンの夢を捨て

生活に戻れば他人の妻夫

倒木の根ッ子何メートルも深かった

大阪市 河 原 林 比 呂 路

錯覚とはなんと便利な逃げ言葉

コンピュータ―粉飾決算とは知らず

塩加減いつしか姑も嫁の味

東大阪市 坂 東 若 芽

ばあちゃんの癖は教えぬのに覚え

春の霧忍者が潜んでいそうなり

白鳥も悲しスモッグに薄汚れ

熊本市 北 川 一 進

影二つ一つになったラブシーン

面影があの子に似てたすれ違い

二言目では内職をすると言

大田市 藤 田 軒 太 楼

あるところにある数の子に世辞を云

運のいい切手は麗人の舌を知

役人の固さ茶菓にも気を使

和歌山市 増 田 次 章

都会の不思議故郷を捨てさせる

正体を見られても月冴えている

塾から塾ぼくたちの今日暮れてゆく

堺市 藤 井 一 二 三

幸せは帛紗さばきの音しずか

公害に悩むか鳩の白もあせ

出張へ富士はそそくさ姿消し

鳥取市 有 田 鹿 子

通院へ降りかかる雪が冷たすぎ

子が炊いた粥に愛情の湯気が立ち

忘れたい思い出ばかりがつきまとい

尼崎市 中 谷 利 美

酔っている証拠二級としらぬ舌

見られてる気配に筆の字がふるえ

五日目に日曜がくるいそがしさ

大阪市 木 村 濁 水

国旗出す向いの人とおめでとう

宝くじ正夢なれとだいてねる

貧乏を意識上手に餅を焼く

大阪市 和 田 痴 亭

電話する娘の声既に妻となり

まだまだのつもり鏡が承知せず

聴診器ハートの悩みもきいてやり

鳥取市 藤 本 佳 女

三億円ドラマを真似たように消え

汚職また給食までもかじりだし

小包へ母は愛情つめて来る

出雲市 竹 内 李 朋

久し振り肩叩かれた初詣

満ち足りた朝の光をまぶしがり

いい返事待つ玄関の寒椿

八幡浜市 別 宮 す き

横むいておとした涙を子がみつ

地下街を出て北風に叩かれる
地下街の権利なる程人の浪

七尾市 松 高 秀 峰

一大事正座の新郎足しびれ

今治市 原 田 輝 親

何もない空が泪を吸うてくれ

税金のことにはふれずよく稼ぎ
誰よりも自分が知ってる学力差

大阪市 西 本 保 夫

石を見ろ石が我慢をしろと云う

今治市 古 野 伶 人

こうなれば度胸のあるのが平社員
学卒がサンづけで呼ぶはじめだけ

羽曳野市 榎 本 吐 来

批露宴牧師ひとりが酔わぬ人

やがて敷く顔とも見えず高島田

鳥取市 稲 村 光 枝

初恋のひとはお下げの俵で生き
お愛想のよい小児科へ行くと決め

大阪市 藤 田 頂 留 子

無風地帯 時には叱言はしくなり

ドラム見る角度が違い気まずい夜

今治市 渡 辺 南 奉

墜落事故突張りのない雲の下
宴会の前に見ておこ非常口

岡山市 行 吉 照 路

二の舞いを踏ませぬ為の育児本
東大に振り回された輪転機

大阪市 有 信 新 之 助

めしの種職場で欠伸かみころし
妻病気娘の味つけほめておき

愛媛県 渡 辺 あ き ら

番町の歴史を嘲うプラスチック
出不精が出かけるめでたい羽目となり

河内長野市 井 上 喜 醉

友情を心の奥で触れたがり

ヘルメット角帽よりも大事がり

堺市 羽 田 一 扇

期待する世代はゲバ棒振り廻し
生きる汗プライドなどは言うといれず

大阪市 江 城 功 雄

岐阜市 川 鱈 魚

自活して寺もカラーと言うテレビ
気のゆるむ財布も春の面白さ

鳥取県 鈴 木 村 諷 子

岡山県 川 端 晴 女

鳩の巣を残して庭の手入させ
老人の家にも春風吹いて来る

神戸市 横 山 孜 孝

堺市 藤 谷 象 園

過去秘めて顔美しく化粧する
欲しい本手帳に書いてだけで済み

大阪市 田 中 多 幸

羽咋市 三 宅 ろ 亭

順法の汽車は遅れて駅を発ち
その花にああ青春を思い出し

新潟県 高 野 不 二

大阪市 福 田 蘭 子

マスコミが犯人逃げる手を教え
血の中に明治もあって生きている

広島県 南 条 露 声

京都府 福 村 飛 龍

門灯が深夜について我が子待つ
手さぐりに懐中電気をまず探がし

鳥取市 米 原 一 稔

大阪市 島 野 大 吉

旅に出て妻こまやかに世話をやき
こう逃げる段取りつけた非常口

京都市 藤 本 征 山

尼崎市 平 井 露 芳

曲がり釘叩き直して又打たれ

駅長へ息子の急行通過する
広い空夏には夏の青さもち

鳥取市 藤 本 和 宏

カラーテレビカラーテレビ夢まで色がついて来た

先祖にも恥じず先祖も貧しかり
無報酬だから大きなことが言え

独酌の銚子雫まで飲み乾され
聞き上手嘘も上手に聞いてやり

老いて未だエッチな唄も出る若さ
虫好かぬ相手の声に電話切り

税金のもどった分を飲んで来る
カラーテレビ買えと銀行グルになり

映画では此処で口づけするポーズ
誘いたくないのが先に誘いに来

新妻が遠慮なく出すいい意見
繁栄の素は食べ方添えただけ

鳥取市 米 原 一 稔

京都市 藤 本 征 山

鳥取市 米 原 一 稔

京都市 藤 本 征 山

鳥取市 藤 本 和 宏

トランプへ蜜柑買わせる父を入れ
もう籠も要らない小鳥になって馴れ

鳥取市 藤 本 鎮 也

カナリヤが目醒めその次母が醒め

三億の誰が受けたかプレゼント
ユーモアの飛び出す籤も出来上り

大和郡山市 中 内 孚 彦

大阪に出て騒音がよくわかり

鳥取市 谷 尾 透 風

芽を秘めて吹雪に耐える糸柳

身の上を聞いたが運のつきとなり

香川県 西 山 綾 子

目撃者まわらぬ舌でする証言

里帰り盗人程は持っていらず

鳥取県 谷 無 閑

三面鏡何う写しても氣にくわず

背信の友にもあった生きる道

岡山県 山 田 止 水

目刺しにはせずアゴ刺しにある救い

時刻表変えて過疎地のバスをへし

出雲市 土 江 久 美

夢を追う楽しさもあるベッドの夜

病院にも師走の風が通り抜け

出雲市 安 井 寿 年

兄妹でも男臭いと云うベッド

ゆっくりと吸った煙草にアイデァー

出雲市 飯 塚 全喜知
冬の愛炎の弱さつきまとう
冬の愛痛い肉感だけ残る
岡山県 浜 口 志賀夫
捨犬の哭くだけ哭いて鳥に馴れ
師の影をふまぬどころかつるしあげ
竹原市 森 井 菁 居
野良犬の刹那を生きる眼が險し
愛を受け入れるつもりジンフーズ
倉敷市 河 村 筒 子
後悔の俺の墓標を雨が打つ
迷信を信じたい日の手術室
羽曳野市 前 川 桂 馬
大臣の去年と変らぬ抱負聞く
新婚の名が寄り添うている賀状
京都府 菊 沢 破 天
撰好みされたは皺の無い時分
うぐいすを泣かせた腰はもう延びず
高知県 山 川 勝 子
レットテルを信じて播いた花がこれ

留年へ恩給証書が役に立ち
鳥根 中 島 英 子

皺の手に宝石の指輪落ちつかず
竹原市 出 島 静 波

たとえばの話と弱みついてくる
鳥取県 中 沢 慎 利 子

秘めごとを鏡知ってるように澄み
鳥取市 福 山 貴 恵

クラス会六十路に残る幼な顔
鳥取県 絹 川 喜 久 子

陽当りへ若い二人の夢育つ
鳥取市 河 口 忠 志

トランプへ手加減させる孫の笑み
鳥取市 吉 尾 武 志

鳥の声真似ても小鳥寄って来ず
兵庫県 不 二 木 和 久

もう峠越した静かな子の寢息
米子市 源 氏 勝 久

折詰めを提げて雨傘紛失し
鳥取県 藤 泰 嗣

人妻と知って居たなら惚れなんだ
鳥取市 夏 目 葉 舟

外灯の中だけ雪が降る如く
鳥取市 藤 本 恵 子

追い越しておいてトラック泥をかけ

泉佐野市 大 工 静 子
気に入らぬ話眠った振をされ

出雲市 田 中 泥 子
三億は感心されて憎まれず

長野県 中 尾 愛 子
当番兵敬礼のあとの素顔なる

出雲市 川 谷 政 夫
夢でよい一度会いたいサンタさん

出雲市 栗 垣 信 雄
クリスマスベトナム戦も聖し夜か

羽曳野市 木 村 豆 行
寒げいこやっぱり女の声でした

泉佐野市 大 工 チ ヨ
長生きの蠅はテレビの奥で住み

堺市 伏 見 茂 美
花と寝て花の言葉を聞かされる

鳥根県 志 賀 美 栄
糟糠の妻へ宝石落着かず

鳥取市 近 藤 秋 星
風邪の子を一人残してみんな留守

羽曳野市 飯 田 一 治
母となる幸せ乳房押して見る

仙台市 川 村 映 輝
年金にあぐらをかいて庭いじり

仕送りがゲバになるとは親知らず	札幌市 平野 青夜	ふところが寒くて飲んだ酒酔わず	大阪市 休庭 一休
迂回して寄って貰った気持良さ	兵庫県 高橋 近江	テレビを見ながら孫に教えられ	大阪市 多田 富士
うちの子にかぎってと云うヘルメット	出雲市 山本 朱紅	なごやかな正月父だけ鳥の餌	大阪市 今井 隼人
日曜日庭の手入れはパパの役	大洲市 堀内 曉風	孫の風糸切れたまま飛んで行く	大阪市 田治 一登
外孫は通訳の要る日本語	愛媛県 西田 夫蒸	無理難題吹きかけられる神仏	大阪市 大池 聖川
孫追えば玩具売場で行きとまり	大阪市 岡本 まさひろ	初詣背中の子まで手を合わせ	大阪市 大池 芳
日本の広さ雪だより花だより	岡山県 目賀 芳月	苦労した話も自慢に交りかけ	大阪市 松岡 進
すき間風家賃ねぎただけ入り	諫早市 原田 明春	爪染めた手を合せての願い事	大阪市 花田 繁子
サイセン箱一ぱいになる進学期	岡山県 片山 雅子	ものぐさの隠居小鳥の世話だけし	大阪市 木村 久子
俺は俺むかしの夢を持ちつつけ	西宮市 加納 聖司	正月は孫のお客に婆笑顔	大阪市 森孝華
熱帯魚と同居金魚は冬を越し	高槻市 山田 スミ子	雪やけの孫へ毛糸の針いそぐ	青森県 岩淵 一星
奥様の素顔は小鳥だけに見せ	大阪市 柳生 柳生	泣くために恋があるよな歌謡曲	大阪市 斎藤 三十四
	大阪市 松岡 茶々坊	書くことは孫のことだけ初日記	

中国漫才考

東野 大八

「落語」興津要著（角川選書43刊）という

本を読んだ。日本の落語四百年史である。最近これほど愉快に感銘を受けた軟本はみたことない、と川柳派の友人連中に大いに推賞している。まだ本書をお読みでない川柳人は、挙って一読されるようおすすめする。何も角川書店に頼まれたわけでは毛頭ないのだが、本誌の編集を担当している不二田一三夫氏は、別口に「漫才」という本誌と同じ様な本も編集、なかなか忙しそうだが、さきの「落語」という良書と、この「漫才」を併せ読みながら、私は私なりに中国にも漫才は存在するのか、いや必ずや実在している筈と、あれこれ文献をひくく返してみたり、中国人の友人たちの間でせんさくしつづけるうちどうやら大筋のほどがのみ込めた。かくしてそれらを整理してみると、でっかい大学ノート一冊がいつのまにやら真黒になってしまった。今回はその中国漫才のエキスを書いてみる。日本の漫才や、伝統川柳の庶民の哀歓に、その内容はあまりにも酷似しており、人間の感性からする在り様なんてものは、どこの国の人

たちだって一緒なんだなと思ったことである

まず、NHKの「生活の知恵」式に、かけ合いから入る。設定はむかしの中国の街頭でよく見かける町回りの藪医者先生これがトリだ。鈴を振って病気のケのある連中の注意をひき、呼び込まれると薬箱をひらく。むかしの日本の豆腐屋と同じ商法で、医者というより富山の薬売りの町歩きと申せようか。薬箱の商品は草根木皮、漢法薬の材料である。客は中年女。

「うむ、その病氣、大層難病だな、じやあ白い頭の鳥と七十二の屁玉を飲めば治る」

「そんなものはありませんワ」

「わしも持つとらん。じやあ、別口にいいのがある。石像の頭から出た赤い血、犬の頭の角の粉末。もう一つ蛙の毛カニの血がよい」

「よくもありもしないものばかり並べたわね、ぶんなぐりますわよ」

「おっとまだあるある、これだけは確かだ、密蜂のオスのキンタマ一斤半」

「このデタラメ医者！じやあ、私があんたがべんにお金持になる妙薬を教えてあげるホ

トケ様にもいいなさんなよ、いいですか」

「へ、此奴は耳寄りな、で、そいつはどういう妙薬だい？」

「あんたの家の屋根の上にある」

「ペンペン草か、地蜂のたぐい？」

「その屋根の上の、来年の霜さ」

ざっとこんな調子だ。他愛ないものだが、ちゃんと脚本になって残っている。題して「雙望郎」という。

「落語」によると「昭和五年コンビ結成のエンタツ、アチャコを先頭に万才は躍進をつづけ、吉本興行では八年正月、万才を漫才と改め、九年四月新橋演舞場で「特選漫才大会」を公演して大成功をおさめ、漫才はついに上方演芸界の王座に君臨した」とある。私の十代のころには、鼓持ちの砂川捨丸の掛合いが記憶に鮮明である。ふかふかの張り扇子で相手のおばさんに事あるごとにピタピタひっぱたかれながら、ボンボン鼓を打ち、数えうたを長々とやるのである。

中国の漫才に当るものを灘黄（タンワン）という。この歌曲にも数え歌がある。その数え歌は、一例をいうと、女の生いたちにひっかけて、七歳詩書をそらんじて、八歳絵を学び、九歳刺繍を習い、十歳琴を弾き、十一歳箏曲をものし、十二に機を織り、十三嫁に行く、といったものだ。

徐博森の灘黄に関する記述によると、この灘黄の興りは中国の劇場が茶園と改称する直前に始まり、清朝の全盛期の崑曲から発想された。清朝の世にさる皇帝が崩御された。帝制

の世は不自由である。諷刺と称して三年の間歌舞音曲を厳禁した。(この習慣が日本にもおよんだことは周知の通り。日本は一月月ぐらいだったと思う) 何さま、三年間、鳴物、歌謡は一切厳禁とあつては、舞台芸人たちはめしの食いあげである。

当時、嵐曲は蘇州が本場だったが、銭という人が苦しまぎれに逃げ道を考えた。つまり嵐曲をうんと省略化し、演員を二、三人にして伴奏はすべて絃曲(いともの)にした。必然、その形はつては絃曲と俗称された。この催しはそういう次第で茶館やお座敷専用のものとなり、それがだんだん後進者の知恵と才覚が加り滑稽粹歌の即席演芸となりそれらを灘黄と呼ぶようになった。

嵐曲は、一曲習いたいと思えば最低一カ月はかかる。京劇ほどの頭数や音曲師も要る。灘黄はそうした本格的な中国料理をお茶漬にしてみました。昭和の初めごろには京劇の声色(こわい)が主流となったりした。こうして灘黄は、古典演劇のいわばインスタント庶民化の道を拓く形となった。だから道楽気分の中が五、六人集りその練習をやる。然るべきその道の先生を雇って(一晚二十文)昼中の仕事が終わると一カ所に集り、上達したいと思うと、大きな家や茶館を買切っておさらいをする。家の謝礼や借り賃をうかすため、若干の参加料を頂く。そんな仕組みがそこそこあらわれ、清朝時代は帝が亡くなつて諷刺がはじまると、熊さん八さんの庶民階

段はがぜん活気づくわけである。

灘黄については、いろいろと資料豊富だがその専門的なことを書いても仕方がないので省略するが、日本の漫才に似た傾向を發揮した本職の芸人に、林歩青という天才が出てきた。彼もはじめは、道楽グループの一人であったわけだが、一念発起プロに転向した。彼は、プロになるためには、独自の唱を立案した。というのは身辺で起るさまざまな事柄を立所に歌に仕上げ、それを林賦と称した。今起ったばかりの人さまのトチリを速坐にうたや、京劇の声色の中にとり入れ、やんやの喝采を浴びた。こうして彼の名声はとみに上り十年後(昭和の初め)には、上海の夜花園(納涼演芸場)では、単独のリサイタルを催している。その際、一人の遊客が誤って近くの人工池へ落ち、濡れねずみになった。彼は即座にそれをうたのちへとり入れたので、聴衆を爆笑の渦にまきこんだ。その人気は時の上海民衆のアイドルとまでうたわれ、京劇の梅蘭芳も顔負けの人気スターだったとある。「落語」という本の中にも、落語界の近代化にオリジナル脚本で売り出していった金語楼の一幕が語られているが、彼の兵隊もののヤマトケツタロウから発想していくその後の過程が中国の林歩青とウリ二つなのは、私は民衆の感性とその反能ぶりに国境はないことをまざまざと感じて、甚だ愉快である。

徐博霖もその灘黄の記述の最後にこう語っている。

嵐曲は文人の才筆や編曲になる貴族文学で

あり貴族芸であるが、そうした高度な文芸価値の随落が、結局は真の民間芸術を生んだ点は注目して大なるものがある。貴族趣味の感傷は、こうした灘黄の下賤さを冷罵びん笑するが、下層民衆の胸中を赤裸々に物語って余りがある故に、民衆に愛されるのである。人間感性の価値判断とは、いずれを是とするかは諸人の勝手だが、灘黄の下世話趣味が、一つの感動や感銘を諸人に与えつつありとすれば、余はそこに人間の真を見出し後者をとるにいささかもためらはない。まるで私のいいたいことを、中国人のこの人も言っているわけである。

色が変わりました

川柳塔柳箋

送料 六五円
三三円

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

合資会社
西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3452-14
夜間 06 4408



十九平さんを偲んで

本田 恵二 朗

胸襟を開きっぱなしの友であり、骨の髄からの友である十九平さんの交通禍の受話器の響きは私の全身全霊はガタガタと震え、一瞬口もきけない状態であった。病院にかけつけて彼のいたまい姿に接してショックは倍加する思いであった。脳底骨折による意識不明のまま眠り続ける彼を呼び覚ますべはなきものか、医師団の万善の処置を祈る心と、神仏に祈る心が私の五体をかけめぐり、しめつけてくる。皆んなの祈りのかいてもなく、事故四日後の二月二十五日午前九時十分遂に冥土への旅路に発たれてしまった。享年六十七才であった。残念というよりもくやしいという気持ちで一杯である。

永い軍籍（陸軍大佐であった）にあった彼の心身は頑健そのものであり、明朗で思いやりの深いことは類の無いほどのものであった岡山県世話課長として遺族のために骨身を惜しまぬお世話が続けたことも彼ならではの為し得ないことであった。課員にはオヤジと呼ばれ慕われ、県会議員達は世話課ほど温いムー

ドの課は外には見当らぬと激賞していたほどであった。

彼の生涯の功績であり又大事業は岡山県護国神社境内に厳然とそびえ、芸術美を誇る慰霊塔を建立したことである。陸軍墓地の手狭さに英霊の遺骨は各々に分宿の状態でこのことを嘆き、日夜たゆまぬ奔走を続けて遂に慰霊塔兼納骨堂を完成したのである。英霊の安眠の場を立派に建設した彼の努力は知る人ぞ知るである。尚又岡山県遺族会館の建設を為しとげたことも彼の生涯に残る事業であった。公私共に多忙という言葉は彼のためにあるのだと思えるほどに東奔西走の生涯であったが、その寸暇を縫う如く各地の川柳会を訪ね、独特の十九平ムードを詩き散したものだ彼が被講席に立つやなんとわなく微笑みが満場にあつた。彼がたゞようから不思議であり、少々どもりながらの弁舌に満場魅せられるのである。彼の円熟した人徳がしからしめるというより外に解釈のできない魅力であった。

彼の作句態度の淡々として且つ真剣であつた。

たことが私をしてライバル意識をいやが上にも高からしめた理由である。まことにくらしいほどの落着きをもって、適確に句材をとらえていた。その側で四苦八苦する私を目を細めて眺める彼の童顔がいまもここに浮んでくる。私の遠慮ない毒舌を受けて立つ構えで軽く受け取って、時に美事な反撃で私をべしやんにする。実に爽快なべしやんこであり後味の良い降参であった。

愛妻家であったことも音に聞えていたが、それだけに妻を詠んだ句は豊富だ。掲載されている写真は彼の還暦祝賀に参会した多くの柳友のなみいる前で私の注文に応じてこんな演出をしたのを風来子氏が撮ったものであるつまり私がプロジュサーで風来子氏がカメラマンということになる。

老婆とじゃんけんぽんで肩を揉み

この句を実演させて見たわけである。彼はこの句が好きであり、従つてこの写真も大いにお気に召したらしく、句を書き添えて、絵葉書に仕上げる、親しい人達に送つたものだ。

四十三年十月号の川柳塔の私論柳論欄で彼は自分の墓碑には句を彫って、川柳墓を作るのだと述べているが、彼の歿直後にご遺族の方の言によれば上記の句を彫るつもりだったそうである。つまり遺志だったわけである。そこで風来子氏が彼の直筆のこの句は無きものかと八方電話で探したが見当らず、最後に私に問い合せて来た。私は早速に短冊保存箱をひっくりかえして探したところ、あつた、あつた。なつかしい筆勢でものされたこの句であ



る。思えば彼は私のところに書き残してくれていたことになる。遺族の方も大層喜ばれて、早速車でかけつけて、持ち帰えられたが近き将来この句の彫られた川柳墓が立派に完成することであろう。

ご長男寛輔氏は中央化成品株式会社の取締役であり、岡山支店長でもあり、潑刺として活躍されている。お嬢さん達はそれぞれに良縁に嫁かれて、倅せな家庭を持つておられる

お子達に関する限り後顧の憂いは皆無であらう。奥さまは賢妻のほまれ高く、賢母であり長い間軍人の妻として夫につかえられ、殊に大東亜戦争に際しては、国に捧げた夫ととしてしかるべくお覚悟のあった貴重な体験をされている。夢想だにしない交通禍という、悪魔に夫を取られたご悲嘆のほどは想像の及ばぬ深く大きなものであったにちがいないが、じつと、涙に耐えて動じないお姿は天晴れ軍人の妻だと思つたのは私ばかりではあるまい。私は奥さまの今後のお心が安らかであれとひたすら祈らずにはいられない。

私は彼の初期から今日に至るまでの句を抜き出し、抜き出し玩味しつつあるがいずれは句集として上梓する運びとしたいものと願っている。別掲の一連の句は比較的以前の句を抜粋し、彼の体臭がにじみ出たものばかりを披露したつもりだが柳友の皆さんに玩味して頂き、彼を偲び、且つ冥福を祈つてやって頂きたい。

ご葬儀は二月二十六日自宅にてご遺族、ご近親によってしめやかに密葬の儀が取り行われた。本葬は三月四日、彼が精根こめて建設した遺族会館の大広間に於て、県遺族連盟主催、川柳岡山社、県護国神社、県軍恩連盟の協催のもとにいと盛かに盛大に行われた。

加藤岡山県知事、岡崎岡山市長はじめ、各方面の名士多数の参列焼香があり、川柳界を代表して大森風来子氏の切々とした弔辞に参列の柳友こぞって哀悼の涙を捧げたのである。

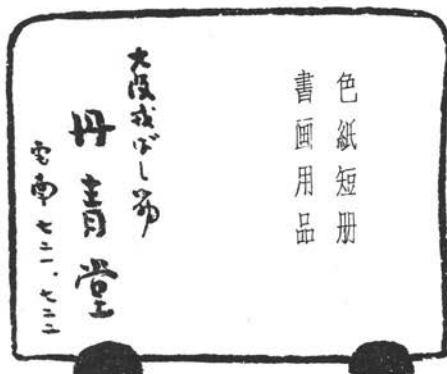
川柳塔社より中島生々庵主幹、川村好郎副理

事長、清水白柳理事の遠路わざわざのご参列があり、十九平さんの霊は必ず感激したところであろう。葬儀の盛大さは十九平さんの偉大さをそのまま表現したものと私は思っている。十九平さんの霊よ以て銘すべし。そして安らげく安らげく眠れと心をこめて合掌してペンを置く。

弔 辞

謹んで川柳塔社参事服部十九平氏のご霊前に立つて川柳塔一同を代表しお別れの言葉を申し上げます。

突然実に突然全く自分の耳を疑うような悲しい電話を頂いた二月二十二日午後以来身も



心もあらぬ痛苦に耐え、ひたすら神仏のお加護を祈りつつ一秒一秒を噛みしめて少しでも明るいお便りを待って居た甲斐もなく、二十五日朝この私達の悲願を形なき迄に打ち砕く絶対絶命のご連絡をうけました。誰が、この限らない痛恨を言葉や文字に表わすことが出来ましようか。地元岡山に於ける柳界は勿論、ひろく全国川柳界のうけた衝撃もさることながら、ご遺族のご愁傷を想えばただただ胸破るるばかりでございます。

顧みますと昭和二十五年八月奈良良二本松で路郎先生の句碑除幕式にわざわざ岡山からご参列下さった折が私達のあなたにお目にかかった最初でありました。その年の九月には川柳雑誌社不朽洞会員に推され以来、ご親交を重ねて来ましたが、路郎先生ご逝去後、川柳雑誌が川柳塔社として再発足致しまするや時を移さず。あなたは川柳塔同人として参画せられ、第一回同人総会にも親しくご出席になって力強いご協力を賜ったのであります。すべて、これらは私達の忘れられない感激の一連であります。昭和三十八年同人総会の決議によりまして参事に推載し、運営基本の最高幹部として活躍下さいました。これより先同僚松江梅里が路郎先生ご指導のもとに大万川柳会を創めるやその趣旨に深くご賛同になり、第一回より二年間連続投句という記録をたてられ、一昨年二月表彰の栄誉をうけられ、その後も引き続きその記録を更新されていたのでございます。

あなたが川柳に対するご関心をお持ちにな

ったのは青年時代からであって、本格的にお始めになったのは終戦直後だったと承っておりますが、常に軽るい諷刺ときびしい穿ちにみちた、あなたの作品は完璧なご人格に裏付けされて日に月に向し、川柳に対する愛情と熱情を示され私達同人一同の驚異と敬意の的でありました。川柳塔社同人として毎月ご投句を頂きました事は言わずもがなであります。私がここに私が特に声を大にして申し上げたい事がございます。

それは、川柳塔社の一般読者向けとして初心者もまじえた一路集という欄に実に創刊号以来一回の欠ぐることなく応募投句されていくことであります。時にはこの欄の選者があなただけでも遥かに柳歴の若い場合もあったにも拘らず、初心者に伍して選をうけられたのであります。その謙虚な心構えは如何にあなた、川柳に生き、川柳を愛しておられたか、そして路郎先生の「川柳は人間陶治の詩である」とのご遺訓を身を以て実践せられ、それを如実に示して居られた事実、こうした事は全くなかなか言うべくして行い難いことでもあります。こういった事例を挙げて参りますとあなたのお人柄、ご仁徳を偲ぶよすがは数限りもないのであります。

言い換えて申しますならばこの神々しいまで遅いあなたの柳魂はわれわれ川柳塔社にとりまして、文字どおりかけがえのない珠玉の存在であったのであります。それをなんとした事でしょう瞬時の裡に私達からあなた



を奪い去ったものがあつたのです。神のいたずらにしては、余りにも惨酷な泣くにも泣けぬ仕打ちであります。私達は今全くの暗黒の中に打ちひしがれております。

甚だわが儘なお願ではございますが、私達の行くべき道を今まで通り暖かく明るくお導き下さるようお聞き届け下さい。こうしてみ霊の前にお話を続けておりますと、ご生前の温容がしきりに去来致しまして、いつまでもいつまでもお名残りはつきません。

この上はどうぞ安らかなご冥福を心から祈り申し上げるばかりでございます。

君去りし謎とけぬまま泣きぬれぬ

昭和四十四年三月四日

川柳塔社主幹 中島生々庵

抄句平十九

掌骨で泣いた八月十五日

見世物が明治の色で来る祭

ラッシュアワー皆んな人生選手なり

蚯蚓切られて僕は長すぎた

肝賢の一字が消えているネオン

男の子二尺飛ばして下駄を脱ぎ

両方の子が呼びに来た立話

神経の太さだけでは生きられず

天才の錯覚新学説を生み

理学士が家相に合わぬ井戸を埋め

元将校休めの姿勢で立話し

うるさ型圧えるためのイロハ順

搾り出すように床屋は顎を剃り

金魚鉢綺麗な順に死んでゆき

一年生のように電光ニュース読み

ゴム靴に目高を入れて子が戻り

大空へ鳶の孤独が輪を描き

廻り道して人生が判りかけ

桐一葉人生観がまた変り

老妻とちゃんけんぼんで肩を揉み

十九平さんご飯ですよと妻が呼ぶ

左手の爪だけつんで妻を呼び

みつ豆で祝った妻の誕生日

女湯で女房の喋る声がする

銀婚の妻トーストパンに似て

また癖が出たかと女房驚かず

ピンチまた切り抜け妻と温泉に浸り

貧乏にめげぬ妻あり有難し

川柳塔社常任理事会

三月五日に常任理事会が開かれた。四日を変更したのは、故服部十九平氏の葬儀へ主幹、好郎、白柳諸氏が参列したからである。

物価高に追いつかれるきびしさを会計部から報告された。どこも同じだろうが、諸氏のご協力だけが同人誌の生きる道なのである。故十九平氏の盛大な葬儀の模様を主幹や好郎氏から報告があった。

出席―柳宏子、水客、形水、多久志、生々

庵、好郎、文秋諸氏。

関戸宗太郎氏逝去

療養中の関戸宗太郎氏（小松市同人）は四十三歳のはたらき盛かりを三月三日朝八時にこの世から去っていかれた。病名は喉頭ガンで金沢大学付属病院で手術も再三されたそうだが、ついに氏の新作品に接しることができなくなつた。同市の四方天弘美氏から、この悲報がもたらされた。三月六日の本社句会で十九平、宗太郎両氏のご冥福を祈った。謹悼

★路郎忌句会は

七月七日(月)

午後六時開催

以和貴荘で開催することになりました。地方の方ために同会場で宿泊もできますが、早目にお知らせください。冷房完備の涼しい会場で、阿倍野ターミナルには地下街も出来ま

セールス

光好陽子選

セールスに言わす金のある我が家
セールスが顔売る頃にや転勤し
セールスのすすめ上手に月賦ふえ
ヤクルトの小瓶のませて喰ひ下り
セールスに向かぬ向かぬとまた続け
方便の嘘セールスに許されず
釣好きのセールス釣りを見て帰り
セールスの今日はおみやげ要る
セールスに肩たたかれた月給日
やりくりの知恵セールスに訓え
先輩としてセールスが頼みに来
セールスをあなどるよと犬が吠え
欠点も言うセールスで信用し
セールスの勝負呼リンからはじめ
化粧品セールス見本の顔で来る
セールスの土産に近づく子を叱り
セールスのすすめ上手に丸められ
セールスの腕を買われて引抜かれ
セールスがもう顔出し被災地区
セールスが美人で高い方を買ひ

曉明 青夜 勝子 みのる 庸佑 章雅 筒子 可住 弘朗 里風 幽谷 初甫 与根一 千翁 止水 光枝 七面山 秋女 誓二 どんたく

セールスのもと先生が来て契め
セールスが品の苦情を聞かされる
口下手でいてセールスのよく稼ぎ
セールスも鞆に入れる風邪薬
茶柱が立つてセールス歩が軽く
セールスの初め親せきだけ頼り
セールスマン若さも一緒に売る
セールスマン不倫な恋を見てしま
セールスの顔の広さへ用頼み
セールスの名刺は指で丸められ
セールスの押しても駄目な引こ
ポリーナスをむりセールスまだ通
生れのようにセールス笑顔見せ
分割にするとセールスつまとい
折角の休みをセールスつぶしに来
免許証をそうセールスつまとい
セールスの不況宝くじも買ひ
商売と別にセールスうまが合
縁談の方へセールス熱を入れ
お隣りも買われましたと気をも
無駄足を重ねセールスらしく生き
セールスの鼻へお腹の減る匂い
猛犬の貼紙セールス歩を返し

佳

半休 佳女 代仕男 木魚 無聖 曉風 惠二朗 素身郎 鶴声 利美 品充 征山 和宏 鎮也 泰嗣 礎山 光道 輝親 南奉 頂留子 公輔 葵水 十九平 礎山 幽谷 惠二朗

背 広

長谷川紫光選

セールスの呼吸教え子から学び
団体と見たセールスは先に降り
人
セールスの友情歩合もわけてやり
地
セールスが足で築いた金字塔
天
セールスの秘訣まごころだと悟り
就職の孫の背広へ目を細め
新入社員 齢より地味な背広を着
左遷地へ古い背広のままで行く
齢よりも若い背広でよく稼ぎ
検札へ背広のポケット多すぎる
背広とは縁なき職に生きつつけ
その中の地味お悔みに行く背広
退院へ持参の背広身に合わず
応対にだんだん慣れた背広の子
着たきりの背広で果す小さい義理
旧姓のままの背広で悪びれず
三味線が背広を脱がすほど酔わせ
背広着た後姿が生きうつし

柳子 木魚 春日 誓二 十九平 近江 章雅 惠二朗 宵明 雅子 南奉 幽谷 英子 里風 青丹子 梁水 筒子

抜目なく背広のネーム覚えられ 暁 風

肌合がおうて同性愛に堕ち 十九平

カクテルの甘さ今夜はゆるす肌 無聖

初歩教室

題 「誘」

本田 惠 惠二 朗

この頁を担当することになって光栄至極と
思うと同時にその責任の重さをすっきりと肩
に感じている。でも勉強を仕直す最良の機会
だとも思っている。私の主張など織り交せて
全国の柳友の皆さんと対話することの出来る
喜びに胸ふくらませている。

題は一字題を出すのが、熟語であつてもよい
から、巾広く解釈して伸びのびと作句して欲
しい。発表された句は随分と添削されている
かも知れないが、ご自分の原句と照合して考
えて見て下さることが私との対話だと思つて
頂きたい。

あくまで初心の方を対照にしての教室であ
つて、初心の域を脱したと自覚した方は堂々
と勇退して頂きたい。さて作句に当つて何か
基準のようなものが欲しいと初心時代は思え
るもので、それを求め望む方が多いことを私
は知っているの、初心時代の作句方程式を
先ずはお伝授することにしう。

(十七音字) 上五——中七——下五

(句) 発想——内容——気もち

(例句) 並木路——母校へ続く——なつかしさ
「並木路」と発想した。その内容は「母校へ

続く」である。その気もちは「なつかしさ」

で一句が結成されたことになる。この方程式
のもとに作句練習を開始すると案外に川柳入
門がしやすいものである。そこで今回の課題
「誘」の作でこの方程式にはまるものを次に
連記して当教室のみんなで鑑賞してみたい。

誘惑に勝った夜空に星が笑む 秋 女
星が笑むということは気もちを表現している
のであることに注目して欲しい。

誘惑に勝ったあと味ふとわびし 秋 月
おみくじは大吉誘いに乗ると決め

くされ縁いやな誘いを断われず 進 人
木枯がのれんくぐれと誘いかけ

誘惑に負けてもみたい酒となり 洋 々
スモッグまで誘致する気はなかったに

比呂路 冬 扇
入信の誘いへ反抗したくなり

大阪のネオンはウインクして誘う 保 夫
これら一連の句の優劣は別として座五に気も

ちを述べている点が前記方程式に一致するも
のである。大いに応用してみて欲しい。

初心時代は句の表現が単なる説明に過ぎな
いものとなつてしまひ易い。今回もそれに沢

山出合ったが私に言わせるとそれは句材であ
り、句境であつて、まだ句にはなっていない
ものである。つまり川柳以前のものであるか
らそれを川柳にするべく四苦八苦の努力をす
るのがむづかしく又楽しいことなのだ。

誘われた遊覧飛行に明日は乗る 近 江
これは説明しただけのことと句にはならない
遊覧飛行に誘われ明日へ胸おどる

こうしてみてみれば佳吟とは去えないが説明を
脱することだけは出来るようだ。

口笛を吹くと二階の窓があき 文 四
吹くとは無駄文字であり、説明的である。

口笛さつと二階の窓があき
打ては響くという感覚を盛り込めた。

以下添削を加えた句を披露して各作家の方々
と膝を交えて対話しよう。

誘いの目避けよう気づかぬ顔作る 千 代
句材はつかめているが表現へもう一と苦心さ
れた。原句との対照によつて、それを悟り

且つ思索してみて欲しい。
誘われも誘いもしない梯子酒 渚 水
七色の夢路に誘う慈母のうた 東雲楼

誘われんども先輩だからつてゆき 葵水
商魂がどの字で渡す花名刺 一二三

誘い水どうも汚職の匂いする 三十四
誘い水どうも汚職の匂いする 三十四

おもちゃ屋へ誘い出すほど子が育ち 瑞枝
誘われてよかった花の香にむせる 晴 女

泥沼へ誘う悪魔の手が白い 茶々坊
茶々坊さん原句は燃焼不足でしたよ。もう一

歩突っ込んで行かねばならない。座五に句の
生命があることを知らねばならない。

妹を誘うデイトで恋不振

誘われた方も悪いでケリがつき

誘い水チヨロチヨロかけて腹探る

凝音効果という手のあることも知って欲しい

七人の敵が手招く春の宵

どっちから誘うともなく席を立ち

誘いあう酒うつつんを持ち寄って

誘われて誘うてうれしいランドセル

夢亭さんは初心ではない。一連の句を見てそれがはつきりと現れている。初歩教室から勇退を命じておく。柳界を堂々潤歩せよ。

悪友の誘いへ子の目妻の愚痴

有望株と見た。折角精進あれ。

おトイレへ行くにも女誘いあい

女性心理を見せられた。おトイレとは化粧室の意味であって句品を下げない。

誘う気へ女黙って身構える

失恋の虚脱革命に誘われる

誘惑に勝って下宿で膝をだき

黒帯のさすが誘いに乗ってこず

誘われていやと言えない義理があり

露戸

利美

多幸

孜孝

誓二

史朗

夢亭

夢亭

夢亭

夢亭

夢亭

夢亭

夢亭

夢亭

夢亭

夢亭

夢亭

夢亭

夢亭

長女結婚

高 鷲 亜 鈍

(長女辰子結婚を祝し)

一つ池真鯉緋鯉に水光る

空中を自由にあるく夢も暇

純粹の皿すべらして白い道

賢妻の誘導尋問にひっかかり

目で誘い額で応える退社前

掌を派手に握って振って誘いの術

句主若かりし頃盛んに用いた術を白状したら

しいけはいを感じて微笑ましい。

誘われた競馬にふところ吸い取られ

やきよいの匂いが孫を誘いに来

かつこよく誘いをよけたマイホーム

誘われて茶席にはべりかいた恥

誘われたから行くように言うて出る

蝶々も花に誘われうかれ出る

珠数と珠数誘いおうてる天王寺

文楽へ誘うてくれる良い嫁御

落のとうに誘い出された春の土手

芳子さんの一連の句、それぞれに味があるが

説明調を抜ける努力をおこたらぬこと。

食欲を誘うワサビに突き刺され

どこを突き刺されたかわ言わずと知れている

からわさわざ鼻を句面に見せる要はない。

ささかオパーに表現して面白味を加えると

静子

新之助

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

静観堂

いう手法を知って欲しい。

どっちからともなく誘う縄のれん

誘われた弱味たふぶり待たされる

徹夜業して誘蛾灯昼寝する

誘われてうけてみたのが合格し

お花見に誘われたのが実を結び

利用価値ありとふんだか誘いかけ

迷惑な誘いに礼を言わされる

悪友の電話と妻との板ばさみ

ヒモつきと知らずホステス誘うてみ

お愛想の誘いへちやんと来てしま

毎日五句以上の句を生み出そう。あたかも毎

朝歯を磨くように。それが何よりの作句勉強

法だと私は信じている。ご健吟あれ。

四月二十日締切・六月号発表

五月二十日締切。七月号発表

題「音」

題「愛」

★辞典を開いて見る。熟語や類語を探が

してみる。中広く伸び伸びと作句する

宛先 7111 倉敷市下津井二二五二

本田恵二朗

両首を押えつけねば喧嘩はやめぬ

感情をこらして義母の便器洗う

信心は親孝行を押しつける

怒ったり叱ったり神徳なかなか備わらず

ひとり寝てひとり起きてきた日帯がなし

母親の便りにはきまって風邪ひく

子の立場からこんな親父は無いがまし

輝親

一休

弘生

芳汀

白酒

百酒

軒太

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

茂美

大 萬 川 柳

「誕生」

入選発表

選者 清水白柳
投句総数 七百七十二句
入選 五十四句

大 阪 小松園
星の誕生アマの熱心さが見付け
八尾 鬼 遊
誕生の地へ立ち作家想を練り
倉敷 梁 水
軽く見た誕生石の値に慌て
大 阪 あいき
女ばかり生れ夫へ気をつかい
豊中 古 方
誕生の由緒にふれてくる絵巻
堺 一 舟
同じように産んでも雑種はと
堺 素 郎
五人目にやっとなんちんけて
富田林 きはち
血圧と年には触れず誕生日
大 阪 真 砂
初孫の誕生言いたしかくしたし
松江 与根一
新語誕生漫才コンビ売れはじめ
堺 青 香
誕生日かげ膳もすえ故郷の母

大 阪 誓 二
誕生日うっかり喋り歳がばれ
大 阪 頂留子
祖母は鯛坊やはケーキの誕生日
鳥取 天人
誕生地ここにもあった観光地
大 阪 儀 一
日曜のパパ起される誕生日
美弥 弘 道
誕生日知らず施設で育てられ
富田林 花 梢
誕生日忘れてしもた終電車
守口 笑 風
男の子です看護婦よくしゃべり
呉 麿 光
惚れている方は忘れぬ誕生日
兵庫 可 住
誕生日も知り合い二人の世界来る
大 阪 慶之助
誕生日だったと気づくしまい風呂
仙台 光 道
豚の誕生見まもる夜の遠雪崩

大 阪 進
誕生日憎まれながらまた迎え
桜井 雀踊子
誕生日長女がおぼえていてくれた
高石 好 郎
もう里の親しか知らぬ誕生日
倉敷 扇 水
誕生の祝辞保険屋から貰い
大 阪 美 房
迎え水みたいにパパの誕生日
和歌山 虎 城
スター誕生脱がされる覚悟もし
大 阪 庸 佑
日本の誕生不可解な神話
尼崎 慶 彦
誕生日どころか目下社のピンチ
倉敷 春日
産声へ指が揃っているかいな
岐阜 鱗 魚
貧乏がなんだ男の子が生れ
岸和田 きさ子
厳肅にミクロの誕生写される
誕生日石も知らず老けた薬指
大 阪 形 水
誕生日ですよと出掛けに念押され
寄附の要る会に誕生祝われる
大 阪 暁 明
誕生祝父の都合で日を替える
大 阪 小 路
誕生日秘書が覚えていてくれた
大 阪 小 路
寮生で祝ってくれた誕生日
選者 吟
高槻 静 馬
元日の生れ屠蘇とちやで損み
ご利益はまともて双生児授けられ
大 阪 トク子
母さん星に告げようボクの誕生日
米子 千代
誕生日まともてすます子沢山
戦死した子の誕生日忘れず
子にバグ貰って気付く誕生日
佳 句
笠岡 郁 雄
難産がいつも話題の誕生日
倉敷 春日
誕生日すし屋で落ち合う共稼ぎ
大 阪 美 房
新聞に載らぬが僕の子が生れ
松江 与根一
恋人が出来て誕生日派手にする
倉敷 素身郎
誕生日ほんとは産む気でなかった子
人ノ 句
松原 史 好
親の気も知らず大晦日に生れ
堺 天 笑
地ノ 句
セットまでした誕生をとばけられ
天ノ 句
藤井寺 吸 江
誕生日飲んで喋ってみな帰り

甘茶など懐古趣味だよ灌仏会
大萬川柳四十四年度第三回

ベストテン (三月現在)

一	文秋	八〇	大阪	十一
二	小路	七〇	大阪	十二
三	柳志	七〇	大阪	十三
四	千代	七〇	大阪	十四
五	瑞枝	六〇	米子	十五
六	吸江	六〇	藤井寺	十六
七	史好	五五	松原	十七
八	天笑	五〇	堺	十八
九	青香	五〇	堺	十九
				二十

大萬川柳大会

とき 44・2・23
ところ 大 萬

(三才と軸吟だけ発表)

席題「美人」

吉岡 美房選

人事異動あつさり美人引き抜かれ
美しい母で決らぬ息子の縁談
居眠りのやつぱり美人の方へだけ

席題「馬」

傍島 静馬選

馬見ればぐれた夫へうらみごと
親子馬カメラへじっとしてくれず
馬の足馬の心になる演技
馬鞭に従うほかなし雪無限

席題「成りゆき」

中村ゆきを選

手おくれの癌なりゆきに死期を待ち
成りゆきに逆うてみる石握る
成りゆきにまかせて下駄で行くとも

宣介

秋月	四〇	岡山	二二	鱈魚	三〇	岐阜
虎城	四〇	和歌山	二三	旅風	三〇	大阪
水客	四〇	大阪	二四	里風	三〇	倉敷
花梢	四〇	富田林	二五	阿茶	三〇	大阪
形水	四〇	大阪	二六	弘生	三〇	大阪
小松園	四〇	大阪	二七	慶之助	三〇	大阪
素身郎	三〇	倉敷	二八	静馬	三〇	大阪
葵水	三〇	和歌山	二九	素郎	三〇	高槻
美房	三〇	大阪				
多志	三〇	西宮				
与根一	三〇	松江				
曉明	三〇	大洲				

昭和四十四年度第五回
「湯気」五句以内

★

以下略

第六回

締切 四月二十日

「野良犬」五句以内

締切 五月二十日

投句先

大阪府高石市高師浜三丁目五ノ六
郵便番号五九二
川村 好郎

★

大萬川柳大会の関連記事が63ページにもあります。

成りゆきにまかせる恋の逃避行
兼題「吸物」 笠原 吸江選

吸物が出てまだ飲み足らぬ浮かぬ顔
吸物へまだまだ母の味が出ず
みそ汁にのりと卵の旅づかれ

兼題「水」

正本 水客選

誰かいるから飛べそうにない水溜り
凍るとき水に刃物のこころ見る
水に生き水に恨みもある仕事

兼題「注文」

金井 文秋選

アメリカの注文通りに動かされ
注文のとれない憂さも妻が受け
注文は杜絶え返品まだつづき

兼題「好奇心」

橋高 薫風選

あつけないものが待ってる好奇心
千翁

塗り立てのペンキへ触れる好奇心
好奇心女の方は捨身なり
好奇心凄じいピールのゲップ出し

兼題「素顔」

野田素身郎選

天眼鏡どぎつい化粧の下をよみ
素顔でも女形とわかる身のこなし
生活の色に素顔を塗り代える

兼題「意志」

本多 柳志選

意志弱い順からデモに狩り出され
だまされる女へ意志のないネオン
キッパリと絶めた煙草の夢で起き

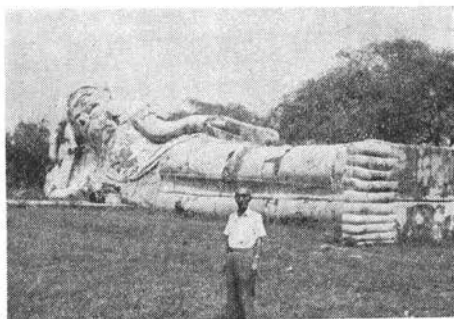
兼題「代がわり」

菊沢小松園選

代がわり若さのはずむ声になり
代がわりしても遺風のこる店
代がわりのれんの重みかみしめる

柳志

☆ 柳 界 展 望 ☆



パンコック寝像の釈迦の前で

大阪同人加藤貞山氏

(橘 高 薫 風 担 当)

▼麻生霞乃先生は湯春四月になるまで外出を自重、盲腸手術の余後を室内で過しておられるが運動不足にならぬよう注意して順調に体力も回復されている。「道後温泉の絵葉書を拝見して、道後温泉の皇室の方がお泊りになったお部屋やトイレなどを狸通さんのご案内で見せて戴いたことを思い出し、そして、狸通さんのお店のお二階にある「たぬき御殿」のことなどなつ

かしい思い出をあらたにし
ています。」とお便りを頂
戴した。
▼青玲社医家日本画展は三
月十一日(火)から十六日
(日)まで阪急六階美術部
特別陳列室で展覧された。
直原玉青先生ご指導の会員
三十数名の出品があったが
本社関係は、生々庵主幹の
「白椿」小石夫人の「花」
河村瑞川氏の「表裏」など
好評であった。
▼中島生々庵主幹、川村好

郎副理事長、清水白柳編集
長の三氏は三月四日午後一
時から営まれた故服部十九
平氏の葬儀に岡山県遺族会
館へ同行、多数の川柳人と
ともに冥福を祈られた。
▼第三十六回奈良県川柳大
会は五月十一日(日)午前
十時から薬師寺本坊養徳院
(近鉄西の京駅東百五十米
で開催。兼題、門・糸・米
・鮎・川・土、会費三百円
(発表誌・写真・拝観料)、
緑の季節柄家族の同伴を観
迎している。(家族は拝観
料など百五十円)
▼第二十三回長野県川柳大
会は四月二十七日(日)午
前九時から飯山市民会館で
開催、兼題、朝・親子・森
・ヘルメット・王冠、投句
は各題二句を四月二十日ま
でに百円封入の上、長野県
飯山市戸狩、飯山川柳キマ
ロキ社内、川柳大会事務局
宛。

▼第三十九回京浜川柳大会は
四月二十九日午前十一時か
ら勤労会館大教室で開催。
兼題、占う・牙・石頭・行
違ひ・からかう・閃く・世
帯・肩・収入・お詣り、各
題三句、投句は百円封入横
浜市南区井土ヶ谷中町一〇
七志水剣人方、京浜川柳大
会事務所宛。
▼観光川柳十五周年記念大
会は五月十一日正午から東
京九段下日刊工業新聞社で
開催、兼題、受付・平社員
・宣伝・課長・残業・ボー
ナス・タイピスト、各題二
句。
▼木幡村雲句碑建立記念川
柳大会は四月六日(日)午
前十時から大東市野崎町野
崎観音で開催。会費三百円
(昼食・記念品)
▼奈加川創立三十周年記念
川柳大会は五月十八日正午
から東山荘で開催。兼題、
紅白・十年・よろこび。
▼京番創立四十年、御所柳
百五十号記念事業に「三万
平方米の川柳大会」と銘打
って開催される大会は、六
月二十二日(日)午前十時
から、平安神宮の神苑一坏
に繰り広げられる。併せ、
京番同人句集の出版も当日
行われ大会出席者に贈呈さ
れる予定。

▼第十三回岩手県川柳大会
は六月二十二日北上市常磐
台北上市民会館で。
▼さいたま川柳大会は六月
二十九日(日)午前十一時
から埼玉労働会館ホールで
開催。兼題、波・間接・の
このこ・ポッシン・動く・内
弁慶・脱出、各題三句、投
句は十五円切手十枚封入し
て、六月十五日までに、浦
和市常磐九の一四の六武藤
かめ吉方、川柳大会事務局
宛。



タケダ

疲労
肩こり
神経痛
食欲不振

アリナミンA



⑭

▼昭和四十二年年度の不浪人賞と蝶五郎賞が青森県川柳人連盟から発表になった。不浪人賞には、古本の朱線にばくもそう思う。岡本から氏授賞。句集柳誌の表紙を長年版画で飾った故松尾少輔氏が蝶五郎賞。

▼竹原川柳会では例会の他に研究会を持たれているが二月は篠田洋子さん（中学二年）居て十九名もの柳人が集り、意見の交換があった。若い芽の精進をおよこび申し上げる。

▼故今井鴨平五年祭が二月十一日岐阜市の魚清で営まれた。大阪から河野春三氏東京から山村祐氏らの参加があり、地元柳人とともに墓参、故人の噂話に花が咲いた。

▼平安川柳社四十四年度の事務分担が発表になった。各部門の責任者名を転載すると、総務部、北川絢一朗会計部、西沢清二、同人部田中秀果、編集部、坂根寛哉、発送部、井上高雄、句会部、桂ひろし、の諸氏。

▼柳宴（岐阜川柳社）二月

号は通巻百八十号、柳宴十五周年記念号（一）として発行、一月十五日の記念川柳大会は百六十名の参加者で極めて盛会であった由、東野大八氏も出席された。

▼川柳「はこだて」二月号は故加藤春人追悼号として二月一日発行

▼一杯水三月句会（備前川柳会）浜田久米雄氏一行歓迎川柳句会として三月二十三日午後一時から下関市細江町国鉄ひよりやま荘で開催

▼浜田久米雄氏（岡山県参事）は今年中に句碑建立を目指して準備に大奮で、すでに石は届いたとのこと。今からお祝いの日をたのしみにしています。

▼故服部十九平氏も、生前から、生きていたうちに川柳墓を建てたいと志を述べておられたが、是非柳人仲間の手で遺志を実現してあげたいものと思う。

▼直原七面山氏（岡山県同人）は、紋土一月号に「川柳は一つ」と題して一文を発表せられたが、革新川柳側からの反論、その反論が

大いに期待される。

▼本田恵二朗氏（参事）は六月一日の川柳岡山社創立第三十周年記念全国川柳大会の第二部討論会の講師を、故服部十九平氏に譲り担当されることになった。

▼川村好郎氏（副理事長）は二月に引続き三月も玉島句会に出席、倉敷の柳人多数と交歓された。

▼工藤甲吉氏（青森参事）は東奥日報社の弘前支社長に栄転が内定しているとのこと、およこび申し上げる。

▼高木夢二郎氏（東京都）は故三太郎先生の会葬から帰宅された翌日頸部疾患のため入院、手術切開をされた。ご全快を祈る。

▼むらくも川柳会（島根県）の親桜句会（四月六日午後十一時開催。兼題「公害・水客選」「二十・緑之助選」「満員・新雪選」「ハプニング・大鳥選」「本気・祥月選」「花見・明朗選」「柳話水客氏」。

▼井上旭峯氏（倉敷同人）は食道疾患のため岡山医大

病院田中外科へ再入院された。投句を当分休むのが残念である。

▼故工藤安亭氏の追悼句会が、安亭氏宅で三月二日開催、盛会だった。

▼四方天弘美氏（小松市）は故関戸宗太郎氏（小松同人）に川柳をすすめられただけに、入院中もたびたび見舞いに行き、病状を本誌へ寄せられていた。三月五日の葬儀は盛大で、川柳塔三月号を棺に入れておくられたとのこと。

▼川端柳子さん（岡山市同人）は、近く銀婚式を迎えられるので、玉島五月例会を、祝賀句会にしてお祝いを計画が進められている。

▼林夢虹氏（豊中市同人）は三月八日四国松山へ出張途中車内でふあうすと東京同人の岡柳蔭亭氏と乗り合わせ連絡船の中で二人句会を開くなど退屈することなしに目的地に着き好運快適な旅を楽しまれた。

み

んなの暮しが明るくなる

セキスイのプラスチック

積水化学

本社 大阪市北区淀屋町1

▼橋高薫風は三月二日土佐市民会館落成川柳大会に出席、次いで母と長男同道で足摺岬、松山、琴平、屋島を見物、六日帰阪したが、各地で、川竹松風、奴田原紅雨、三井醉夢の同人諸氏に歓待を忝うした。「すすむさんが生きていたらと思う旅」。

▼瓢太氏の関西寄術教室が関西テレビで放送大好評。

六日 午後六時

(河井庸佑整理)

出席・与呂志・双葉・大吉・庸佑・野迷路
 ・滋・古方・天笑・村雲・一舟・義英・柳
 ・宏子・三夫・摩太郎・千万子・史好・金三
 ・一榮・貞山・新之助・天樹・つき子・誓二
 ・白柳・肖二・凡九郎・笑痴・言也・静馬・
 ・美代・葵水・瓢太・鶴幸・幸子・寿子・花梢
 ・吸江・喜風・形水・儀一・百酒・水客・醉
 ・々・万的・弓彦・好郎・綾女・富久・鬼游
 ・いさむ・奈良子・千梢・文秋・トメ子・葛
 城・小松園・頂留子・生々庵・宣介・恒明・

木幡村雲選

粗品だけ書くのに硯とり寄せる
粗品もつるの汚職組品でひっかかる
アルサロの粗品が掃毛遅らせる
あるところにある宝石という粗品
カラーテレビ粗品と書きた無気味
妻のいる粗品の列を遠ざかる
奥さんには心当りのない粗品
売り出しの粗品が好きなら市場籠
頼みごと粗品と書いた餌をさげ
頑固さが粗品も受けてくれぬ父
真心のこする粗品は小さき子
定連へ粗品は別にとつてあり
言い張って見ても汚職になる粗品
言筆に粗品と書いて粗品来る
エレベーターよ私は粗品だけの客
日くある粗品中味を匂わせる

古村 天金 古柳 滋雀 鬼メ 誓二 花梢 花郎 好樹 与呂志 古梢 古方 三笑 雲

橋本言也選

やりやうこしてまふ九十円の玉待つ
運ちゃんがぶつきらばうに乗さる
タクシの順番になる頃バスが奥の
回り道されてタクシ高くつき
地下鉄で10分タクシで20分
みえりがほん手前からタクシで
タクシを子供が先きに止めて待ち
どん底の友へタクシ遠く止め
タクシの無言へ夜がこわくなり
タクシを拾うに余程歩るかされ
郊外へ出てタクシが話しかけ
タクシを飛ばして来たと遅刻する
タクシ待つ間に酔も醒めまい
無事故遅個人タクシに親しまれ
終電に遅れ個人タクシはボラれ
タクシでアナ場たずねる旅の客

葛城
一城
頂留子
肖二
千笑
千笑
小松園
富久一
奈良子
鶴良子
柳天
笑雪
瓢雲
静馬
一三夫

席題「腹いせ」

戸田古方選

抜けがけの顔立て初耳のていする
 抜けがけのも一緒に集断られ
 抜けがけのつもりで後手になった僕
 抜けがけへ死神両手抜けてた
 抜けがけを夢みて人生五十年
 抜けがけに地盤を荒さる選挙
 抜けがけを笑って許す太腹
 抜けがけを賞められ此言も聞かき
 抜けがけをたくらみ六法全書読む
 切り札があり抜けがけの背を見る
 記者だまり皆ぬげがけの夢をもち
 陣の中にライバルが居て抜け切れず
 抜けがけを教えてくれる友があり
 抜けがけと思えばライバル顔を出し
 抜けがけを承知奥の手打って置く
 抜けがけはよきて妥結の途を行く
 午前十時先きを争う特売場
 抜けがけをして平凡にゴールイン
 抜けがけを素知らぬ顔で茶をすすり
 誠実が勝ちと抜けがけさせておく
 ライバルの瞳が抜けてねらってる
 抜けがけの二人彼女の門で会い
 ラール守れば抜けがけにしてやられ
 ライバルに職場の花を射とめられ
 抜けがけの栄光孤独を噛みしめる
 抜けがけの恋はルールを言うとしめず
 抜けがけもならず血圧あげただけ
 命まで張ったスクープ噛みしめる
 兼題「インテリ」菊田いさむ選

柳の「インテリ」がインテリである言葉待ち
 酔うほどに支離滅裂のインテリ
 屁理屈へインテリ巧みに理屈つけ
 業界のインテリ一人がへそ曲り
 インテリのハイミス理想を下げぬま
 インテリのふれこれ縁を遠下げる

生々庵
 花郎
 酔郎
 笑痴
 義英
 庸言
 滋雀
 いさむ
 水客
 千幡
 千子
 公輔
 花梢
 与志
 貞山
 村雲
 水客
 柳宏子
 好一郎
 柳宏子
 どんたく
 一三夫
 鬼遊
 笑痴
 一三夫
 一舟
 文秋
 一三子
 一三子
 章雅
 千子
 一栄
 奈良子

「新しい南画と
俳画の描き方」

別の鍵はパトロンだけが持ち別室へ妻呼ぶ医者に見放なされ借りる身の弱さ別室で待たされる別室に来てから女嘘を吐き別室の謀議仲居を遠ざける別室に新朗側は着て待たし別室へ社長が立つて歌となり別室で特級酒が出る名幹事別室で叱って呉れたと感謝され別室で通しい母のガンを知る別室を占め麻雀の徹夜組別室は怪しんで女将は言い含め別室に呼んで事にしてしま別室で隠居がうなる碁石の音別室でシャツの口紅落して来別室ですねてる妻にさからわず饗応のワナ別室に待ちもつ女社長男を入れぬ部屋を待ち昇進どころか別室でタコ釣られ別室に呼ばれふくみのある話別室で次期会長にもめている別室からヒステリックな声する別室で爪弾くギターに孤独感別室で着替えて来いとくつろがせ別室で聞いても医者はお大事に別室に招んでも失意の肩を抱き別室に通すお客は目知らせ別室で大きな字になる酔いづれ宿の別室非常にも知らぬ火事香典のことで別室もめめめ約束が違ふと別室から通れ別室で聞こうと社長なお強氣

一二三
礎山 軒太 いさむ 金村 葛城 生々庵 笑痴 凡九郎 村雲 美代 誓二 葵栄 貞山 奈良子 静馬 与志 文秋 肖子 儀三 金三 好一郎 滋久 吸江 葛城 儀柳 白松 小松 頂留子

発表を待つ別室の胸さわぎ肩書きが特別室を用意させ別室の二人ことりと音させず別室であかんべえしている見合別室はおじさでなし姫でなし別室で美容体操する社長別室に呼んで小指のことにふれ別室で女あまえる横ずわり帳場で夫婦寝たのは別の部屋別室で社長夫人のヒスを聞きダルマの眼入れる別室と巻かれ別室はひそひそ遺品分けでもめいいにくい話別室の隅でする兼題「神経」川村好郎選

奈良子 醉介 宣梢 花笑 万梢 花笑 三夫 天客 水笑 生々庵 摩太郎 季風 旅風 芦朗 正庵 弓彦 生彦 滋彦 与志 公輔 磯山 水客 恒城 葛城 恒城 花梢 金三 千子 村雲

★堺・若芽川柳会(四月十三日午後六時)
題「年頃」「替え玉」「不服」——摩太郎居。
★玉造川柳会(四月十日午後六時)
題「遠音」「捻座」「ねらい」——信用金庫玉造支店階上。
★南海川柳会(四月十七日午後六時)
題「標識」「あいまい」「しびれ」——ナンパ高架下・親和クラブ。
神経を電気ギターがかきまわし神経を酒でまぎらすだけの知恵言也当てつても無神経にはぬかに釘神経にさわる言葉へ虚勢張る頂留子神経を使う割に出世せず綾女敵しさが神経質な子に育て義英偉大なる神経音痴高吟す小松樹四面楚歌末梢神経みな動き天笑あやまって済む神経を試される天樹気のせいというから余計気にかかり無神経かいなとつねるほどに惚れ摩太郎附添の方が神経すり減らし柳安子他人事だから神経を太う見せ好一郎無神経の姑であつてつがなし郎

★食満南北翁十三回忌川柳會が、五月十一日(日)午後一時から、堺市立第三幼稚園——南宗寺内(阪堺線御陵前下車北へ一丁、東へ二丁目)で開催。
柳話「南北翁を偲んで」堀口塊人氏。兼題・役者 左久良選・もてる 摩太郎選・ぼんち 白柳選・創作 聡夢選・各題三句。会費二百円 投句百円、呈作品集 締切五月五日 堺市九間町山ノ口、八木摩太郎宛

近 詠

大阪市 橋 本 緑 雨

倅な暮しですわと叔母の前
冬の風袖で顔においをする

須坂市 高峰 柳 児

清貧を売物政治へ傾ける
値上げ沙汰いきむ野党も頼られず
女秘書話題へつられまい堅さ

小松市 山上 千 太 郎

せい一ぱい生きてだんらんのあるくらし
会者定離良い思い出の人ばかり
定職があるから世間を広く行く

賛否にも又それぞれの意見の差

和歌山市 秋月 宏 方

玉砂利の道は神さまおすきです
いくつかの恋を育てた喫茶の灯
日向ぼこ死ぬ日待機する如し
きょうもくる保険屋犬ももう吼えず

大洲市 米 沢 曉 明

ガラス一枚割って雪投げやめにする
土手行けば人も土手行く春日和
墨のおちたところから色紙へ乗せて書き

今治市 長 野 文 庫

固執してその場限りの勝名乗り
酔っていて口がすべった勇み足

二軒目も不首尾セールス腰くだけ
惚れさせるように細工をする写真
荒れている訳をライバルだけが知り

今治市 月 原 宵 明

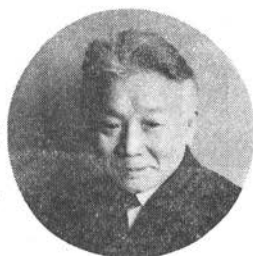
一生の歴史働く外はなし
トーストとパン小鳥より飼ひ易し
旧暦を信ずる土へ種を播き
なる程とうなる落書あるトイレ
極道はピンクの車乗り廻り

名古屋市 長谷川 鮮 山

年輪の相違成る程など想い
高飛車におい君と呼ぶ冷たい目
百円としてあてがって夫の酒値
商人の肚を見せてよ四捨五入

雅号ぶっちゃけばなし (70)

こうきち



吉 藤 甲 吉

小学校時代の先生で川柳の先生
でもあった長谷川霜鳥氏がつけて
くれた。先生はかつて川柳「みちのく」同人
で、上京後は一時「川柳研究」の幹事もした。
のち川柳を離れ、第二十代江戸釣人横綱と
なり、いま東京都釣魚連合会常任理事で会報
「釣界」の編集にあたっているが、級長だっ
た私が算術の試験のとき、白紙答案を出した
ところ、その反抗精神をほめ、「甲」をくれた
ことがあったから由来はその辺らしい。人
にきかれると県出身の国語歌創始者・鳴海要
吉、反戦詩人・大塚甲山の二人をミックスし
たものとホラを吹いているが、やはり県出身
の日本画家・工藤甲人氏と兄弟かときかれ往
々困ることがある。

新聞社員 五十五歳

お買物は 明るく楽しい
ハンシンへ！



阪神

大阪梅田 水堀定休 電大阪 361 1201 (代)

老地柳壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

玉造川柳会（大阪市）

西出一栄報

生きてゆくための獲物へ爪をたて
縄をなう農夫へわらの素直なり
酔っている手がだらしく滑り落ち
いい買物したとその場は思わせる
買物はない地下街を歩かされ
買物は好きで儲けの知らぬ妻
ボナスに買物少し気がゆるみ
餅花に呼ばれて予算通り越し
共稼ぎ今日は夫が買うて去に
手を切つてないで派閥悪びれず
寿へお手をつないだ大安日
階段へ老母の歩みで手をつなぐ
たき火の輪より政治家の居ない国
大焚火五本の指をみな開く
手配師は焚火の輪から抜いて行き
大焚火炎へ空が動くよう
対座して課長の貧乏ゆるぎ知り
無意識に耳をつまんでいた熱さ
切符買うても定期を探す手が動き
無意識な顔をかぼつた急停車
恋心つのれば無意識よそおえず

綾凡九 肖二 滋雀 章雅 金三水 眉城 虎電 六遊 鬼歩 静彦 柳宏 井秋 一文 柳志 古方 柳宏 宇宙 照太

無意識に流した視線へからまれる
無意識に女としての手が動く
カッとなり何をやったか覚えてず
大晦日も家で出来ない不倖
咳をして居留守がばれた大晦日
パトロンも掃除手伝う大晦日
紅白で客足残して大晦日
明治百年余韻残して幕を閉ず
商魂も今日一日の大晦日
クラクション大晦日と云う音を
大晦日うちで見ている歌手もあり
大晦日煮メの味は母手ゆずり
新しい紙幣をへソクル大晦日
南大阪川柳会
金井文秋報

ライバルの靴が光っているひけ目
手を添えて盃受けるうちはよし
ご支援のお蔭を政治にもう忘れ
肩に手を添えた写真を妻かくし
あきらめて押売り団地から戻り
団地の灯四角四角に消えて更け
ベル押せば団地窓から覗かれる
社長また昔の苦勞話し出し
残業を信じた妻の目がまぶし
苦勞人はとときそうではとかず
ボナスをはきず残業期待する
ご苦勞と軽くねぎう年の功
規格品ばかりが住んでる団地
アルパイト団地の歳暮譲り合い
興奮のお蔭で蔭としか言えず
ライバルが病んでフィットし勝ち
栄光に蔭の苦勞は忘れかけ
ママだけがライバル意識して戻り
残業へちかちかネオンの灯が赤い
お蔭様赤子を抱いて礼参り
ライバルを気にせず吾が道をゆき

あいき 形一 竹青 風洞 静馬 貞介 義楽 双楽 はじめ 恭太 白柳 好松 滋雀 白柳 文園 金文 柳園 形水 一舟 あいき 儀二 凡九 吸彦 喜風 君彦 智子 誓吉 生大 長吉

ライバルの休んだ試験気が抜ける
爪染めて男に苦勞した小じわ
残業になって時計が遅くなり
かんじんの金を二仲に書き添える
底辺の苦勞へ政治の手が延びず
荷送りが残業になる年の暮
今にして苦勞をかけた父の鞭
金策の苦勞は知らぬ札の音
和氣川柳会（岡山県） 藤原秋月報

灰汁で煮ることを姑から伝授され
大晦日算盤で叩く肩の凝り
大晦日投げ飛ばしたい失意の日
大晦日予定どおりに陽が沈み
精農がちびりちびりと灰を貯め
大晦日電話暫く鳴ったまま
左義長の灰でふくらむ豆の餅
小走りの妻と出合った大晦日
三億の強奪あつたとも思い
孫に手を曳かれて登る城の階
歳の瀬に繰る来年の星まわり
葉牡丹が寒さに耐えて色を増し
川柳たましま 水粉千翁報

綾虎 静雅 章馬 静水 城女 貞平 芳月 秋子 繁久 伊野 梅泉 秋風 平月 梅泉 子泉 繁梅 柳泉 翁報 梁郎 好子 秀堂 澄二 朝風 柳坊 千林 八笑 克枝 旭峯

泥靴でなんとゆとりのある歩巾
夜半をふと覚めて気になる言葉尻
妻に尻押されて男の顔で出る
母さんは叱る順序を考える
枯れ葉踏み言葉少なに案内され
木枯らしに枯れ葉利那の舞を舞い
考へて見えてあかず
富柳会(富田林市) 阿柳柳太報
派手すぎる布団で老をなぐさめる
座ぶとんの人のぬく味を裏返す
ふとんとは広きのなり妻の留守
親のある幸せ布団に湯が匂う
よろこびをかくせぬ笑顔見やぶられ
よろこびに父の眼鏡がすていて
よろこびが家まで待てず酔いつぶれ
潮騒の岸へよろこびぶちまける
米の価も知らぬお方と妻が言ひ
お百姓の子が米飯を喜ばず
ない時に米を見舞に持つからず
米といて明日の仕事が見つからず
とつときの米を見舞に持つて行き
言いわけのたどたどしさに煩うし
言いわけを聞きたくないを眼を閉し
こいさんは言いわけせんと言いて
言いわけを練るつり皮の手がしびれ
憎い程言いわけ筋が通つて
つて来た子供が言いわけしてく
かんとくに言いわけがある雨のこと
寝てる子を覗いてからの洗濯機
急ぐなら覗いて来ますパチンコ屋
香具師の目が覗いたカモを見逃さず
堺川柳会(堺市) 和海草春報
暖房が消えたも二人気がつかず
暖房の火じつとみつめて孤独なり
暖房器具面目躍如なる寒さ
育痴園 痴亭園

ふるさとのいろり石油に追い出され
暖房に甘えずすぎる風邪を引き
雪国の車窓密柑と一人旅
双六の上りに置いてある密柑
皮むいて筋まんとつてハイカン
ポリ袋みかんの皮の色となり
器量よいのはアメリカへ行くみかん
かたいのはついつい残るみかん籠
幸あれと葉つみかんの大をのせ
カレンダ何のしるしか聞きたがり
コマーシャルだけが大きくカレンダ
商魂はカレンダにも抜目なく
日めくりもあと四五枚ははつとかれ
縁談が決りカレンダ忙しく
ねばられて金貸すやら酒も出し
約束がちがうと仲介腰をすえ
戸締りを待たせもう一本だけつけろ
受付を困らせタレント志願する
粘る気の腹ごしらへもすまじとき
押売りのねばりへ大もしつば向け
あのねばりパチンコだけとは情け
ウオーターだけ残るテーブルまだあり
ウィロー社(ハワイ)
幸運の鍵は二度目の妻がくれば
二度目からはもう言訳を疑われ
二度目には女、我意のままとなり
的確に二度目のパンチもをの言ひ
二度目からは言はず初婚の角かくし
二度目から気心知れた仲となり
二度目まで仏の顔も笑み給う
二度目から度胸すわった司会ぶり
二度目だと言われたくない身嗜み
二度目にはこっそり母へねだつてみ
新婚の宿へ二度目も足が向き
一二三
文和秋
輝介
藻天
白柳笑
雄次郎
武志
宏前
耕人
清涼
好万郎
草正
欽春
青香
金三子
摩天楼
遊仙
茂美

金送れ二度目の手紙へ父が来る
二度目にはもう騙されぬ知恵がつき
幸運が二度目も素通りしてしまひ
二度目だが相手も連れ子目をつむる
高知川柳会(高知市) 川竹松風報
年よりは職人はだのの人が好き
職人のハサミは惜しい枝を切り
職人のみなそれぞれに抱く技巧
職人の根生意地で持つらし
友染職人苦勞を流す加茂の川
職人の疲れをほぐす酒が待ち
損得は言わす職人名を惜しみ
棟梁が見えて散らばる焚火の輪
腕のさえ誇れる自慢の職を持ち
司会者のあせり代慢の職を見え
代理人立てて離婚のケリをつけ
親一人子一人今日の子は代理
顔だけは代理の方が素晴らしい
納得の上で巻き上げたお金
あの頃のあんたと違うあんたです
泣きついたことも忘れて威張りだし
一日の仕事ははじめは落葉たく
プライドを言うてはくれる代理の子
飲びの末座にておれぬ十二月
南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報
基礎作り地味な苦勞を積み上げる
三億円どんな枕で寝てるだろ
小人が素早く枕つて母を呼び
南大阪川柳会吟行
時 四月二十七日(日) 午前十時半
集合場所 七十七駅(京阪)
所 律寺(八幡駅から徒歩十分)
題 気骨、神仏、矢、勝利
会費五百円(弁当不用) 電車賃自弁
万里歩
紅溪
拜山
快夢
起
正一
たかし
斐山
句念坊
勝美枝
晴水
蟠蛇
寛水
晴美
窓花
伊津
柳翠
紅雨
竹青
松風
美知
柳水

つかまつた足をはずして蟹は逃げ
足音で主人と猫がチャンスと知り
軍歌調重たい足も軽くなら
足音を聞き出迎える妻の老い
足早やに借りのあるところ通り抜け
駆け足で来たのにあの娘待つて居ず
初めてのボナス足音高らかに
働いた足をみつつ湯にひたり
それぞれに足踏んまえて居る和合
夜の庁舎音無気味に鳴りひびき
添い寝する妻は目顔で叱らはり
頭から足まで女の目が撫でる
境内砂利踏む足の音も湧え
もう歳か足が敷居にけつまつき
別に用ないのに夕暮れ急ぎ足
わらじばききたえた足を靴が噛み
男の目意識している足を組み
急ぎ足になればほんとの歳が出る

貴征忠泰佳千吉広克一貴富明久加葉透和

恵山志嗣女重春司秋代子夫喜代舟風宏

ふとんから足が出てくる子の育ち
母帰る足音待つて居る気のおせり
おのが足元手にセールス今日も生き
易の灯が迷える足をひき寄せる
城山朗朗会 川口弘生報
仲人の肩書大きく物を言い
仲人をする気高砂習いかけ
仲人の酒一合でこれかいな
頼まれの仲人聲より固くなり
仲人もしやちほこ張つて披露宴
ないない同士仲人金かかり
チョット口すべらし仲人頼まれる
末っ子が片づき仲人癖がつき
仲人が正直すぎてまともらず
結ばせた仲人離婚の世話もする
あせるほど仲人口に引っかかり
人柄が骨折りもなくお仲人し
もやもやを母は仲人まかせにし

芳富渚漁弘多久洛繁本鉄磯和鎮勝
士水人彦生幸子醉子三十四本陸舟山久也久

仲人二人旅立ち役がすみ
仲人に感謝する頃子三人み
仲人が美人で嫁が引き立たず
仲人の話で新婚偉く見え
物価高ばやいて高い方を買え
結構な時は算盤はとつたかれ
モズ鳴いて取入れの秋気がせわし
牛追う手となりは機械で顔合せ
新聞は特価広告見てるだけ
靴音でわかる旦那の帰らだし
噴水の音耳を打つ須磨離宮
真夜中の隣の痴話が気にかかり
白星が続いて塩を高くまき
塩嚙んで勝負にいとむ高見山
塩辛い世や塩気ないにむろめし
塩の浪風に追われて岩を打つ
母の日に昔なつかし塩加減

ハセ耳馬四方喜き聖柳一茶々加はきム準
ヤツ水吉平久川の生休登坊仏乃乃エ人

大萬川柳大会

二月二十三日
十二時半から

春は大萬川柳大会から一毎年川柳界の
春は大萬川柳大会から来る。ゆかりの故
松江梅里氏宅で開催されたが、ことしは
五四名という新記録であった。大萬川柳
大会の壮観さは幹部総出席が呼び物であ
る。

成績によって新鋭が兼題、ベテランが
席題という趣向も愉快だ。そういう意味
から八木千代さんの欠席はさびしい。

好郎氏は、自分としては、この大会がは

じめてだと謙虚に挨拶されたが、過去十
五回の強力なる後ろ楯であり、好郎氏あ
つての梅里氏だったのである。好郎氏は
選にはきびしい故路郎先生公認の難詠選
者であり、また四グループの指導者とし
ての実力は抜群で、この日も功雄・鬼遊
・史好氏ほか多数がはせ参じて協力した
ことは好郎氏ならではの統率力なのだ。

出席新記録は当然のことであった。

恒例の招待宴になってから、川柳塔ス
ターの隠し芸が披露され、遺影の梅里氏
も心なしかほえんでおられた。(F)



ビッグフェア

シルクロード

— 砂漠と遺跡のみち —



3月20日
→ 6月1日

熱砂と冒険と
ロマンのみちを
再現する大博覧会

●入園料…大人150円・小人80円

宝塚ファミリーランド

・ペンペン草・

★陽春四月号—花と酒の句を特集した。ご愛読を。

★初歩教室は菊沢小松園氏にかわって、本田恵二郎氏が独自の才筆をふるってくださった。秀句鑑賞は後藤梅志氏が右手をわるくされ、清水白柳氏にピンチヒッターとして登場場ねがった。学校の新入生とちがって、ともにベテランだけに、また別の味わいがあるというもの。

★二賞の中間発表をした。さうとしたきれいな句が多い

ようだが、選考委員10氏の好みがそれぞれ出ているようである。

★十九平、安亭、宗太郎三氏が急逝された。同人とは兄弟である。さびしいものですね。

★富士野鞍馬先生ほかの原稿が次々に回った。おわびします。

★花とみどりの頃になると、吟行によく誘われるのだが、日ではなく、時に追われてい現状ではどうしようもない。

★またプロ野球に時間を食われる。(不二田一三夫)

六月号発表(4月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

近作柳樽(10句) 菊沢 小松園 選

課題吟(各題5句以内)

「テープ」 竹内 圭三 選

「貸し傘」 岸 南柳 選

「口先き」 尼 緑之助 選

募集

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。

★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

七月号発表(5月15日締切)

川柳塔(10句) 中島 生々庵 選

近作柳樽(10句) 菊沢 小松園 選

課題吟(各題5句以内)

「虚栄」 出原 真奇 選

「ハンケチ」 西出 一栄 選

「石 鱚」 弘津 柳慶 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

本社四月句会

日時 四月七日(月) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275 番

兼題	柳 話
「覗く」	戸田 古方 選
「イメージ」	西田 柳宏子 選
「首」	大坂 形水 選
「後釜」	本多 柳志 選
「後釜」	若本 多久志 選

★ 席題 三題(題と選者は当日発表) 各題三句
会費 二百円
投句だけの方は切手五十円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川柳塔社
電話大阪 3985 番

5月の兼題 「近影」 「道」 「ハンサム」 「年上」

定価 百四十円(送料六円)

半年分 八百七十円(送料共)

一年分 千六百八十円(送料負担)

昭和四十四年三月二十五日印刷
昭和四十四年四月一日発行

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地

編集人 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地
発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一三三八五番
振替口座 大阪・三三三八八番

5 mg
25 mg
50 mg

全身倦怠・肩こり・腰痛
関節痛・食欲不振・便秘
胃腸機能の減退・疲れ目

ハイベスト

活性ビタミン複合剤

疲労
神経痛は
すぐ
おとり下さい

高峰秀子



料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬策 焼売

大阪 なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

あやめ池グランドフェア

世界のカーニバル

6月1日まで

50万平方米の大遊園地を彩る春の祭典!

- 民族衣装の人形で世界の祭りをご案内
- 日本歌劇団「春のおどり」連日公演
- 日・祝は豪華スターのアトラクション
- あやめ池自慢の遊戯施設や動物園など

近鉄

入場料.....200円
こども100円
(近鉄各駅から割引入場券つき 往復乗車券発売)
▶ あやめ池駅前が遊園地



一番よい酒

うまい酒

清酒

菊正宗

宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影